表紙, 目次, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38496

明治四十一年一日發行

自第四九号
至第五二号

仁會雜誌

《非賣品》

仁澤醫學專門學校仁會

十全會雜誌第五十一號目次

○寫眞版

○故小川勝陳君小照及手翰

○原著及實驗……一頁

特別會員 醫學博士 金子治郎

○直達遺傳

○小兒心臟ノ比較的濁音界ニ就テ（附、二圖、四表）

特別會員 岡本京太郎

△第五十一號所載『脚氣病論』正誤

○通信……二三頁

○松原三郎氏書信二通○千葉茂氏通信○松原三郎氏在米最後の通信○加藤寛氏端信○久保武氏消息

○會報……四四頁

○叙任及辞令其他○特別會員動靜錄○級友敷田君を吊す○恩師小川教授の遠逝○阿部先生を迎ふ○金原助教授を送る○中島助教授を迎ふ○弓術部報告○大會記事○弓術師範楠先生逝かる○本校紀念式○第二回陸上運動會○第八回講話大會記事○藥學科學科目及程度改正○本校細則改正○入學式○新入學者氏名○新入學諸君を迎ふ○本年度十全會役員及級長、幹生○雜誌部編輯會記事

○會告……八二頁

○寄贈及交換書目○四十一年度十全會豫算書○校外十全會費納付調書

○附錄

○噫小川勝陳先生

○廣告

○敷件

故小川恩師の言行逸事を蒐集記錄して本誌に揭げ長く高風を偲ぶ一端にもと是を恩師の高弟中最も長く先生に親炙せられ且つ日夕親しく病褥に侍し玉ひし八田智證兄に詢りて氏の甘諾を受けたり爾來兄は繁務の間、しかも病餘の顧慮を捨てゝ筆を執られ本號附錄として載せたる長篇を識さる此篇恩師自記の病中日記あり系圖、官歷を擧げ性行を記し臨終の記、葬儀、追悼の法會に及べり寔に是れ恩師を敬慕し奉る好箇の記事にして目前先生の薫化を受くるの懷あり今茲に此篇のおりし由來を記して特に八田兄に謝する所以なり

編輯局 一委員

通信

○松原三郎氏通信

（五月二十八日紐育發六月十八日着八田氏宛）

世は名利に奔り虚榮に狂ひ紛々擾々直きは傷けられ正しきは退けらるゝ大渦の間に立ちて先きに忽焉として人格問題を提唱し吾人人間の價値は一に其人格の高きに在るを極力絶叫し來りし先輩松原氏は更に實驗的自覺を披瀝し万腔の熱血を濺いて吾人を提撕し吾人を慰藉し深刻ふる全情を表して篤く訓諭せらるゝ處あり

顧ふに余の金澤病院を去る去るが爲に去れるにあらず去らざるべからざるに去れるもの恩師小川先生が其間に盡されたる苦衷と恩情とは一死猶朕ふ處にあらず加ふるに知友諸先輩が軀に餘る全情と慰藉とは感謝措かざる處而して今又松原氏が自家衷心の赤誠を吐露して敷ぶらぬ我か爲に遠く多大の教訓を寄せらる其友誼の厚く信念の深き感極りて又謂ふ處を知らざるおり

げに松原氏や斯る實驗的見地に立ちて世に處し事に當らる氏が心事の高潔にして人格の崇き渠の慣々者流が虚位を擁し虚威を振ふて得々たるものに比して頗る卓越せるものあるを想望すべし

這般の自覺他をして覺らしむるまた尠からざるべきを思ひ茲に再び私信を公にして謹て諸君子が前に呈す冀くは諸君子と共に道を修め德を養ふの一助とせば啻に松原氏が幸のみにあらざるべし　八田生識

花も彌生の廿二日御出の御手紙を頂戴し一讀再讀尚ほ屢反覆せり聞く所は故郷の櫻咲ける消息のそれならで君が多年職を務め學を研ける金澤病院を辭し恩師と親友とに別れて他に移られたる警報！曩きにろれとなくほのめかされたる端書を拜讀せしもまさかよもや等と思ひつゝありしに愈々御辭職せられたりと聞きては君の爲めのみならず病院の爲にも惜しき限りにて滿腔の熱血と同情とを捧げ申候感窮まりて多言する能はず然れども君記せよ人間萬事騫翁が馬とか云ふ諺ありて今日不幸と思ふて居る事でも明日それが爲めに却て幸となる事あり因果應報など云ふ事に亘ると君の繩張り内で小生等の口を利く限りに非ずであるが心だに眞の道にかないなば祈らずとても神は守らんで君の眞情と赤心とは識者の夙に認むる所なり天と人と道とは終に君を棄てざる可し只だ時期に甲乙早晩の差あるのみ君願くは安心する所あれ。

種々不幸の事があれば其度毎に不快の念やら憤怒の意を生ずる事は人情の正さに然る可き所であつて小生は滿腔の熱血を濺ぎて同情を表するものに御座候斯る時に於て自ら慰安せんとするは大に困難なる所なり然るに余は幸にして余の生涯中絶大の經驗を得たる實談あり世の所謂見神なるもの正さに此類の事ならん依て下に畧記して君の御參考に供せん収捨は君の權にあり。

小生は一体人に負け嫌ひの人間であつて小兒時には近

隣の若者と喧嘩するのが余の常習で大に持て餘されて居た小供であつて小學校に在つた時にも温順でなかつた中學に入りても其性質が改まらず何でも教師の擧足を取る事を樂みとし少しでも氣に合はぬ事があればプンプン怒る方で尋中に在りたる時でも品行点は常に七十点以下であつた樣に思つて居る彼の時の尋中の採点法は大に品行に重きを置き學術平均点と品行点とを加へて席次を定めるのであつた夫故例ば學科平均点八十五点品行点九十五点とすれば合計百八十点となるなり然るに若し學科平均点九十五点ありとするも品行点七十点なる時は成蹟僅に百六十五点となりて十五点の差を見るに至る可し併し學科平均点十点多き事は學科が十五あれば百五十点多き事になるなり學科に於て百五十点の多きを得乍ら品行点二十五点少なき爲め成蹟は遙に前者の下位にあるなり、こんな事で小生は常に思ひし位置を固持する事が出來なかつたけれども又品行を改めて温順となる事が出來なかつた、今の君及今の我は斯る席次の如何を念頭に置く事を聞かば一笑に附して顧みざる可し然れども君よ十四五歳時の小兒の腦は正さに斯る可きものなりしなり。

兎に角自分の持て居る性質では學校て大に損であると云ふ事を知りて居たけれとも生來の性質如何ともする事能はず其儘にして居たり、其後小生が醫學校に入る時に一番樂しかりし事は醫學校には別に品行点と云ふものがなく只だ學術的智識の如何によりて奮鬪し競爭すると云ふ事であつた十七歳に垂んとする小生の腦中が當時如何に悅びたりしやは今も覺ゑて居る。

或日の事小生は例によりて友人と爭論し胸中大に不快噴怒の念に驅られながら歸宅の途に就きたり時は正に晩春にして今頃の事なりき憤の眼を仰て天空を一睨したり空は一天晴れ渡りて一点の曇なし此の瞬間實に此の瞬間に於て余は所謂心氣一轉なるものを實驗したり見神と云ふて可なりや否やは余の關する所に非ず、兎ゑ角余は此時宇宙の大景に打たれたり此無限の大空——時に雨あり雷あり風あれとも大空は大空なり無限にして無窮なり余にして若し斯る大空の如き心を持たば人と喧嘩する事も少なく又喧嘩せられても斯程に自ら怒り自ら煩悶する事はなかる可し是れ余が心の狹量を示すに非ずして何ぞやと余が心にして此春の大空の如くならば多少の波瀾ありても常に晴朗和氣靄々の氣を自ら樂む事を得んに我なから誠に淺間敷き事なりけりと深く懺悔して頓に開悟したり、此日より以後は如何なる事に逢ふも余は煩悶する事なく又煩悶せんとする時は自已の狹量を自ら叱責し余は斯る小人物には非るなりと自ら戒め自ら慰むるを常と致し其後は少なくとも外見上丈けは温順になりたる積に御

座候、此實驗により所謂心機一轉なるものゝ存在を自認致し居候。

此自ら叱咤する事によりて大低の不快と憤怒とは自ら胸内より排斥致し居候、夫れ以來自己の胸中は常に春の如く和氣に充ちて居る積りに御座候、當地に來り途上時々支那人等と見誤られ小兒等より嘲弄せらるゝ事あれども別に何とも思ひ申さず候。

然るに頃日小生に稍や不快の事續出せり夫れは此研究所の雇員中に專門の寫眞師ありて腦及檢微鏡寫眞を毎日朝から夕まで取り居候、先頃迄居りたる寫眞師は誠に人の宜しき者なりしも耳が大に遠いので解雇せり此度新來の寫眞師は大に生意氣で小生を馬鹿にし小生も自分の研究材料を寫眞に取る事が少くとも一週間に二三回あるので時に癪に觸る事が澤山あり衆人一として彼を好む者なし依りて余は何か機會がありなば一つひどく打擊してやらん斯の如きものは口で何程云ふても駄目なり腕力に訴ふるのが唯一の方法なる可しと決心して居りつゝあるなり、話かはりて小生は夕食後獨りで島内を散歩す周圍は隅田川位の川なれども大に深く大船の往來常に絶ゆる事なし、然るに一昨日大に霧ありて一大滊船が島の南方に坐礁せり昨夕散歩して此坐礁の滊船を見遠方には世界中の大鐵橋を眺め乍ら何の氣もなく只だ嗚呼絶景だなーと思ひつゝありしに忽ちにして一敎訓は余の胸をつけり平凡なれども一大敎訓なりき此邊は一体に余程深きものと常に思ひしに（一等戰鬪艦が河上まで優々上り申候）滊船の坐礁せるを見て彼所は左迄深からざる事を知れり余が只今の心亦此に類せしに非ずや余は上述の如く大空の晩晩によりて心氣一轉し余が胸量は人並以上に遙に宏大なる事を自信せるに今昨今新來の寫眞師を腕力の下に壓伏せしめんとする程に憤りつゝあるは尙余が狹量を示すものなりと自ら自らを叱責し自ら誡め此瞬間に於て余の胸内は一点の曇なく只今春の青き草燃ゆる花の如く相成り、アンナー寫眞師を念頭に置く可き程の小人物には非らずと忽ちにして頃日來の不滿も消失仕り候、是は正さに昨夕即ち五月二十六日午後六時五十分の瞬間に於ける余の心的機轉に候、胸中大に樂み早速傍にありし花を二種手折りて研究室に歸り水に生けて暫し眺めつゝ此好敎訓を得たる事を自ら感謝仕申候。紐育にて　三郎

＊　＊　＊　＊　＊

紐育の統計二三

▲紐育は實業の大都會であつて市民の大多數は終日商店又は會社に働き從つて晝食には飲食店に行くを常とする。こゝで或日「ヘラルド」新聞社の附近に於ける「レストラント」三十一軒に就て取調べたに二時間内に一萬二千五百人計の御客がありたる由。

▲紐育は雜沓の巷で途上負傷する者が一時間毎に八人又災害によりて死する者毎十七時間毎に一人の割合ありと云ふ。

▲紐育市街掃除會社は毎日四萬圓を消費しつゝあり。

▲米國では「ステツキ」を携へる優長な人間が至つて少なくして或日新聞社の印刷を見物せる者二百十四人中にて「ステツキ」を携へし者僅かに二人にして往來者約三千人中僅に十一人ありたりと云ふ一寸物好きな統計なり。

▲紐育の婦人は中々贅澤好きで中には家庭の面倒を見るのを嫌ひ只だ飲食衣服遊興を恣にせんが爲めに終始「ホテル」に生活する者が一萬三千人計ありと云ふ。

▲紐育市内にて毎日棄てる食物で五十萬人を養ふに足ると云ふ。

▲紐育には約一萬八千四百人の跛行小兒あり。

▲紐育市に於ける鐵道列車が一時間毎に二萬八千人の旅客を運びつゝあり。

▲紐育市は五區より成り其二區内に五百八十七の會堂ありて毎日曜日に參詣する者二十一萬人計りにて男五萬八千人女十五萬二千人位の割合なり。

▲日本帝國全体の歳出（但シ戰時公債の利子を取除き）は紐育市の支出の三分の二強ありと云ふ。

▲紐育の家屋は大抵五階以上にして銀行會社等のある建物は二三十階以上に及び電氣昇降器にて昇降すそこで或會社は五六の昇降器ありて並行と急行とあり、一銀行員の話によれば彼が此昇降器にて上下する計りで一年に百二十九哩を旅行する割合ありと云ふ。

▲紐育を出入する汽船の一等及二等船客が毎年二百九十五萬八千人計り。

▲紐育へ來る移民の五分の一は伊太利人。

▲紐育市民が昨年間犬の爲めに消費せし所十四萬四千圓。

▲紐育では市街電車と荷車と衝突して多少の損害を招くもの毎日二十二計り。

▲紐育へ來る水道の導水管は六十哩の遠方より敷設せられ毎日千二百五十萬石（五億ギヤロン）の水を供給しつゝあり。

▲米國に酒屋の多きは驚くべき程にして紐育の酒屋で賣るのが一時間毎に二十四石三斗位。

▲紐育の中央電話局にて呼出取次が一時間毎に五十八萬六千回。

▲紐育の裁判所一年の支出百六十二萬圓。

▲紐育市公園の面積は七千三百八十四エーカ（一エーカは四段十八歩）にして毎年の經費三百万圓。

▲紐育の劇場には三千八百人の俳優あり。

▲紐育市には滿一歳以下の赤兒十万五千人。

▲馬車の爲めに轢死する小兒が紐育で三日毎に一人。

▲紐育へは毎日三十一の新家族が到着す。

▲紐育目下の人口四百五十萬計にして過去四ヶ年内に百萬人を增加したり。

▲米國に於ける富の不平均は非常なもので毎年の收入の半額は國民の十分の一の者の手に入り約二十萬人が米國の富の半分を占有し殆んど八百万の家族は平均千圓以下の財産を有するのみなりと云ふ。

▲紐育州（人口七百三十万人）には普通精神病院十三、犯罪精神病院二、精神病理研究所（小生の居る所）一ありて患者二万八千二百人計を收容して毎年千二百万圓計を支出す此他に私立精神病院も澤山ありて一千人計の患者を收容す夫故紐育州の精神病院には常に三万人の患者を治療しつゝあり。

▲紐育市の教育費四千三百万圓余。

▲紐育へ來る移民は女一人男二人四分の一の割合なり。

▲紐育には市街電鐵高架電鐵地下電鐵ありて共に十鐵共通あり毎日の收入百八十二万二千圓計。

▲紐育の南端は大西洋なるを以て市街は常に北方へ擴張されつゝありて其繁盛の中心は過去五十年間に北方へ移りし事四哩に及べり此遊興の中心部

にては千二百尺間に二十箇の劇場あり。

▲紐育市が昨年消費せる氷は三百八十四万五千噸（十億四千六百万貫計）なり當地は日本と異り普通の家族には悉く氷箱あるものありて食物を貯藏す。

▲紐育には昨年經濟界の大破綻ありたる爲め市民が金の使用を節儉せる事約壹億圓にして之を類別すれば寶石類二千万圓、繪畫及美術品千六百万圓、花百万圓、自働車百万圓、ヤット（遊帆船）二百万圓、私宅建築二千万圓、箇人的消費金（旅行等）四千万圓。

▲紐育にては花の爲に費す所每年一千万圓に及ぶ日本にては病氣見舞等に菓子等を贈る習慣あれども當地にては食品類を人に贈ると云ふ事なく大低花を贈るなり現實及現金主義の洋人には一寸似合はざる奥床しき習慣あり皆溫室に培養するを以て冬と雖も種々の花あり又高價にして一寸さした花でも二圓以上を要す。

▲紐育には大小の公園百十三ありて兼六園の如き小庭を以て唯一の公園とする金澤人の夢想する事能はざる所あり大なるものは千七百六十エーカ（一エーカは四段十八歩）に及び山あり川あり湖あり瀧あり森あり全体の價格二十四億万圓に當ると云ふ米國最大の公園イエルロストーン、パークは一通り見るに一ヶ月を要し日本に於ける一ヶ國よりも大なり。

▲紐育にて酒を賣る免許ある家（酒屋、倶樂部、宿屋、）が九千三百二十八軒ありて昨年間に消費せる所麥酒二百十二万五千石（内三半プロセントは輸入せられたるもの）燒酎類十五万六千石（内十二プロセント輸入品）葡萄酒五万八千二百石（十八プロセント輸入品）。

▲紐育の貯蓄銀行は八千百二十年に預金者八千六百三十四人預金二百二十四万圓なりしに昨年には預金者八百六万七千人余預金六十六億万圓余に及べりと云ふ此他普通銀行に一層多額の預金あるは勿論なり。

○松原三郎氏通信（八月十三日紐育發 九月五日着）

わが畏敬する先輩松原三郎氏は今回いよ〳〵歸朝の途に就かれたり十二日紐育出發北米南部諸州を巡遊し名殘を大西洋に止めて歐洲に渡り獨墺佛英を歷訪して地中海印度洋を經十二月廿一日神戸着港の豫定なり氏は來春より精神病學教授として母校に教鞭を執り多年蘊蓄せる處を以て親しく育英に從ひ斯學の開發に勗むべしと云ふ、吾人は氏の如き篤學篤行の士が深遠なる理想と崇高なる人格を以て日夜薫陶の任に當り我が日本の醫界殊に我が北陸の精神病學界に一新紀元を劃せられん事を期待して欣喜措く處を知らざるなり謹て旅程の安全を祈り恙なき溫容に接せんことを望む

八田生識

只今高安先生の二十年祝賀號たる可き十全會雜誌を落手非常の感興を以て通讀仕候祝賀會も中々盛大に行はれたる樣子にて欣喜の至りに堪ゑず候丁度子が親の壽を賀すると同一にて愉快之に過ぐるものなかる可しと存候今後は成る可く澤山の祝賀式が續々あらん事を祈り候是れ吾校の誇とする所にして又學界の美とする所と存候。

貴兄よりの三枚續の金澤景色繪端書なつかしく拜見仕り種々故郷の事共を想起せしめ候又仰の如く來春早々より御地の御扼介になる事に相成申候是れ全く御地に於ける諸先生及先輩友人諸氏の御厚情と御盡力とによりたるものにして感謝此上もなき事に御座候今迄諸兄等へ一向何とも此事に就きて申し上げざりしは別に事を秘密に附

すると云ふ水臭き理由にては無之只だ全く決定せざる前に本人から騷き立てゝ味噌を附ける等ごは余り体裁の宜しからざる事に就き實は沈默して居りし次第に候間何卒不惡御諒察下され度候、今更申し上ぐる程の事もなく現時の小生は十年前御地に蟄居せし小生と同一にして斯學の素養も淺く斯道の經驗にも乏しく社會の事情にも通せざる一介の青書生にして未だ研究の方位を窮めず生活の軌道にも觸れず自分乍ら呆れ返り居る次第に御座候此上は只だ諸先生先輩及友人諸氏の敎示せらるゝ所に從ひ訓誡せらるゝ所を守り其愛顧と補助とによりて其職に背く事なき樣に勉めたきものに御座候間歸國後は舊に倍して一層の御忠告と御厚情とを蒙り度候間此段幾重にも奉願候。

小生の歸國旅程は大畧は別紙豫定表の如くに御座候へ共此表なるものは小生が獨り地圖を相手として一人極めに極めたるものなれば實地に臨み臨機應變的の所置を要する事勿論の儀と存候何分時日が接迫して居るに付き歐州にては勝景や歷史的建築物、寺院等を一切抜きにして此度は只だ必要欠く可からざるもの例へば大學精神病敎室、病理學敎室、心理學敎室、法醫學敎室、公私立精神病院、精神病コロニー Colonie 及家族的看護 Familienpflege. 犯罪精神病院、神經保養院、白痴院、癲癇病院、低能兒の補助學校、Hilfsschule. 酒精中毒保養院、感化院、監獄等を一瀉千里的に見物する積に御座候。

小生の只今の所の豫定にては米國出發前に南部米國に行きて「バルチモアー」Baltimore. の Johns Hopkins 大學、「ヒラデルヒヤ」市の Pennsylvania 大學、「ワシントン」府の白宮等を初めとして主要なる精神病院を一見したる上、九月十二日赤星汽船會社 Red Star Line の Finland 号に乘込みて紐育を出帆し九月二十一日頃「ベルヂユーム」國の Antworp 市に着き此處にて一通の荷物を日本郵船會社支店又は他の倉庫會社へ預け入れ極端の身輕となり赤毛布一枚で歐洲を一巡する積に御座候其他小生の標本類及書籍等は所々の稅關にて箱を開くのが扼介にもあり且つ「パラフヰン」に包埋せるものは印度洋航海の節溶ける憂ひもあるに付き之等は六箇の大箱を作り之に入れて米國出發前に太平洋を經て神戸の稅關へ送りて留め置き小生の着神時に稅關の檢査を受ける事に可致候。

歐洲見物の作戰計劃とも云ふ可きものは別表の如くにして Antworp にて荷物の始末を附けるや否や本場の獨逸へ突貫する手順に御座候又出發前瀛船會社にて旅費を銀行爲替とし四十圓乃至五十圓位の小額の爲替を澤山作りて歐洲到る處の都市の銀行で取り替へ乍ら使ふ積りに御

座候又大都會の大「ホテル」なれは現金に替へなくとも此小切符にて直接通用する由に御座候實に西洋の經濟法は甘く行き居り候、日本の銀行や郵船會社にても歐洲の主要都市の銀行と連絡をつけて旅客に便利を與ふる事緊要なりと存候。

獨逸突入の場所は先づ Rhein の下流に出で Köln と申す所に行き此處には大學なきも醫學校ありて近頃犯罪精神病を研究しつゝある若手の Aschaffenburg と云ふ人あり先つ此處を皮切りとして船にて Rhein 川を上り Bonn 大學(九月二十四日頃)に行きて Westphal 及 Foerster氏の御顏を拜見しサッサと船に逆もどりして「ライン」川を上り稍や有名なる Heidelberg (九月二十五六日)に行き神經細胞病理學の最大大家 Nissl や Hoffmann, Williams 等を見上け夫れから Strassburg (Schuchardt 氏), Freiburg (Hoche), Tubingen (Gaupp (此人は米國にて一度逢ひ申候) Stuttgart, Nürnberg, Erlangen (Specht) 等へも行くや否やは未確定なれども多分時間が許さず又大して行くべき特別の感興も小生には無之候故此等は御免蒙る事として先づ Würzburg (Rieger, Weygandt 等九日二十七日)へ行き次で Frankfurt (九月二十八日)にて有名なる Edinger (神經解剖學者)の研究所を拜見し翌日は Wiesbaden へ落ち行きて一寸生命の洗濯をやり之より Giessen (九月三十日)にて神經病等の診斷術法を深く研究せる Sommer 氏教室の器機を一見し次で Marburg (Tuzeek 及 Behring) 及 Göttingen (Cramer, Ehrlich, Rosenthal) には括孤内の如き有名なる大家あれども小生の精神病學にはあまり大した事なきに付き Iena (拾月一日)へ高飛して Binswanger 氏(此人も二回計り米國へ金儲に來られたり)の教室等を一寸素見して Leipzig (十月二日三日)に行き有名なる神經解剖學者 Flechsig, Held 及實驗心理の鼻祖 Windt 等の一喝を戴き次の日は Altscherbitz と云ふ精神病院を一見する積に御座候之は獨乙にても比較的新らしくして規模も大なる由に候へ共米國の紐育州等に於けるが如き大規模の精神病院は一寸獨乙にもなき事と信じ居候次で Halle (十月五日頃)に行くとも左程の大家は無之候、之より愈々當世の檜木舞臺伯林に參上して十月六日より十四日頃迄で滯在し此處にて精神病の Ziehen, 神經病の Oppenheim, Eulenburg, Bernhald. 法醫の Strassmann, 病理の Orth 等諸大家雲の如く柳櫻をこき混ぜて都ゞ春の錦なる所に恍惚として彼處此處へ徘徊し又伯林附近には Dalldorf, Buch, Postdam 等の精神病院、白痴院、監獄等を平げ古本屋などへも足を向け器機等をも整へ先つ伯林にて當代醫學の精と華に接し面の皮を一層厚くし之れからが田舍見物と云ふ方に御座

候。

十月十五日頃に伯林を發して南方へ向ふべく候伯林より北方には Kiel, Rostock, Greifswald, Königsberg 等あれども小生の專門には特別の興味なきにより南方の Breslau に向ふ可く候、此處には精神病の大家 Wernicke 逝きて今は其高弟 Bonhoeffer が陣を搆へつゝあり、酒精精神病にて一寸名ある人にして Klinik も新築せるものなりと云ふ、之より墺國に足を入れ山碕先生の居られた Prag（十月十七十八日）に行き此所には Pick と云ふ若手あり此大學には Pick と云ふ人が澤山あつて精神病學教室の外に婦人科及び皮膚尿器病學教室にも Pick が居る故人は之を區別して Hirn-Pick, Harn-Pick, Huren-Pick と云ふ尊稱を奉つて居ると云ふ樣子に御座候次は維納にして伯林に次げる大學なれば惡かろう筈もなく御蔭で驅廻るに足も疲勞可仕候此處には Wagner, Freud, Kalisko, Obersteiner, Hirschwald 等の面々あり十月十九日より二十四日頃迄滯在仕る可く候又附近の狂院へも見物に出掛け可申候。

次て再び獨乙に歸り河内、田上両氏の居らるゝ München に參る可く候此所は當時精神病學界の最高府にして有名なる Kraepelin 氏を始めとして尙ほ Alzheimer, Gudden 等あり此精神病學教室は近來建築せるものにして世界最上との評判物に御座候故此處は三日間計り（十月廿五六、七日）止りて精神病學の進歩に接し之より瑞西國に入りて Zürich（十月廿八日）に行きて神經病理にて有名な Monakow や近頃の觀念聯合試驗の中堅者 Jung 等の教室を一見して當時下平先生の居らるゝ Bern（十月廿九日三十日）に着く可く候此處には Speyr 等の諸氏あれども小生には興味薄き所に候故直ちに鞭を上げて巴里の花の最中へ轉け込み十一月一日より五日頃迄で止りて有名なる Dejerine, Marie（失語症の大家）Babinski（足現象にて御承知の人）Voisin 等の病院を見る可く候此中の Salpetrier 病院は精神病治療上に一大革命を起したる有名なるものにして此院の醫士 Pinel が一千七百九十二年始めて精神病患者より手械の鏈鎖等を除去し普通の病人らしく人道的に治療せん事を企てたる所に御座候之迄は何所の國にても精神病は神罰だとか狐が憑いたとか云ふて治療よりも罰する方に重きを置き大に狂者を恐れたるものに候ひしも此大精神病學者 Pinel の大仁惠慈と大英斷とによりて今日の精神病者治療の端緒を開きし所なれば余等後輩者は隨喜の涙を流して拜見せざる可からざる病院に御座候。

之にて歐洲大陸の見物を終り氣車にて Antwerp に走り此處にて先きに殘し置きたる荷物を取纏めて日本郵船

會社の讃岐丸に乘るか或は此船が倫動に四五日しか碇泊せざるに付き先き廻りして倫動に行き一週間計り滯在して買物等をなし十一月十四日讃岐丸にて倫動を出帆し途中 Portsaid（十一月廿六日）Suez（廿七日）Colombo（十二月十日）Singapore（十八日）Hongkong（二十六日）を經て本年十二月三十一日神戸着の豫定に御座候。

神戸にて先きに稅關留置として送り屆けし荷物等の檢査を濟まし次第直に金澤に向ふ次第に御座候或は船が一二日後れて着くかも知れず又は一日位早く着かんとも限らず未確定なれども兎に角一月三日頃には貴兄各位へも拜顏して久し振りで新年を迎へると云ふ手順に御座候間此からの御手紙は適當の所へ下され度候此紐育の研究所なりとも宜敷候へ共急がざる御手紙なれば倫動大使館宛にて御送り下され度奉願候、又船の出發後あれば S. Matsubara, on the Japanese S. S. Sanuki. として適宜の港へ宛御差出し下され度候。

此頃は Siberia 鐵道にて歸國する方々もある樣なれども初旅の小生には船で諸國を見た方が一層興味ある事と存じ候以前は大に呑氣なりしに愈々歸國する事となると一日も早く歸り度き心地せられ申候。

日本では外國に行くと云ふ事が大變の樣に候へとも當地では各人の家元が外國にして例へば小生の研究所にては所長が瑞西人助手が數人居るが一人は「スコットランド」より來り小生の外に今一人の日本人ありて顯微鏡等の圖を書きつゝあり小使一人は愛蘭土より來り事務員三人中一人は獨逸にて生れ顯微寫眞師は「デンマルク」より來り「ミクロトーム」切りの男は伊太利と獨乙の合の子にして研究室の標本造りの雇女四人中一人は獨乙一人は露國生れと云ふ次第に御座候病院の方は尙ほ多數の人故更に複雜し患者四千六百人中其半數以上は外國生れのものにして眞の米國人は誠に少數に御座候夫故診察に通辯を要し甚だ扼介なるものに御座候世界各國一として來らざるはなく目下日本人患者男三人女一人、日本人と西洋人の合の子の女一人（支那にて生れたり）朝鮮人一人、支那人は澤山あり、患者中最も多きは獨乙人、露國人、愛蘭土人、伊太利等にして當地に於て最も下等視せらるゝものは支那人、黑人、獨乙人、伊太利人、露國人の下等者に御座候日本にては英語よりも獨乙語が高尙に聞ゆれども當地にては大禁物にして獨乙語で話するものあれば下等の猶太人と判斷せらるゝを常とし新聞のポンチ繪にて教育なきものを描出するには常に英語に獨乙の冠詞をつけたり又は英語に獨乙語の前置詞を附けて談話せしむるを常例とす。

當地では歐洲等の外國へ行くにも旅行免狀を要せず誠

に自由なるものに候、いつぞやも申上候通り眞の自由を實驗せんとせば米國に來るの外無之歐洲にては稍や窮屈なる樣子に候、男子壯志を抱きて自由の土を踏み自由の空を仰ぎ自由の氣を呼吸し自由に奮闘場裡に馳驅し自由の競爭路頭に突擊して其手腕を試む亦た男子の快事に非ずや精を盡して戰はゞ刀折るゝとも何の恨をか遺る可き近頃日本も稍々世界的に相成候得共中々當地人に比較すべくも非らず米國にも多少の日本人あれども物の數に非らず彼等のなす所多くは一時的にして小規模に止り到底白人と競爭の域に達せず候●●●●●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●
●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●●
●●、桑港附近に日本人排斥運動の起りたるは日本人の勢力の進步して白人が恐怖心を起したる端緒にして日本の勢力の發展上大に祝す可き事と存候、未だ米國東岸に日本人排斥のなきを祝する者多きも余は之を嘆せんとす何となれば紐育附近には日本人甚だ少數にして到底白人の敵に非らず則ち日本人は未だ白人の眼中になきなり日本人若し此紐育附近にも發展して競爭場裡に白人と敵するを得る程度に進まば其排斥運動の來る事期して待つ可し是れ悲しむ可き事に非ずして大に祝す可き發展に非ずや。

日本の新聞紙悉く筆を揃ねて桑港市民の人種的偏見を攻擊す亦た何ぞ夫れ短見甚だしき人既に先天的に人種を異にす苟も人にして感情と云ふ心理作用を有する以上は焉ぞ人種的偏見なくして止まんや若し人種的偏見を云々せば日本人は當地人よりも遙に深く人種的偏見を抱くと云ふを憚らず今若し多數の支那人及朝鮮人の勞働者が日本へ入り込みて鐵道工事、鑛山事業等を掌握せば果して如何？日本人は人種的偏見を放棄して彼等を歡迎するや否や誰れか此問題に否と答ふるを躊躇する者やある全人種にして尙且つ然り況んや異人種に於てをや斯の如き人種的偏見は常軌にして毫も不思議とする所に非ず余は此人種的偏見に深き日本人が當然存在す可き桑港の人種的偏見を攻擊するを見て驚愕の措く所を知らず一時の政策として表面上に人種的偏見を攻擊するは不可なからん然れども多數の日本人は眞情より本氣になりて攻擊しつゝある者の如し短見も亦た甚だしと謂ふ可し、一時移民を禁止して排斥熱の冷却するを待つを最上策とするもの比々皆な然り斯の如きは所謂遼河の涸するを待つよりも久しかる可し、何となれば人種的偏見は正當に且つ永久に存在す可きものにして紐育附近の如く衝突なきは尙ほ日本人が全く無勢力にして未だ社會の競爭場裡に少しも影

響と勢力となき事を証するなり、若し勞働者に非ずとするも日本の商業家が紐育に來りて白人と競爭する程度の發展をなすに至らば必ずや彼等の排斥を受くるに至る可し然るに當時紐育にある日本の僅數の商人なるものは悉く日本の商品を販賣し其區域誠に狹く白人實業家とは全く其商業區域を異にし從つて競爭の起る事もなく又排斥の起る事もなし余は常に怪めり何故に日本の商人は日本品のみを販賣せざる可からざるか白人と同等に鐵類を販賣し硝子類を販賣し衣類を販賣し或は靴屋となり或は煙草屋となり以て初めて白人と競爭するの快を得るなり徒らに店頭に提灯を下げ扇子を擴げ絹布を飾り茶を並べつゝある間は白人との競爭場裡以外に逡巡するなり既に競爭なくして何ぞ衝突排斥の來るべき而して多數の日本人は之を悦べるものゝ如し井蛙的短見も亦甚しと云ふ可し彼等の眼界を逃れ彼等の膝下に屈して而して衝突を逃んとす何ぞ其怯なると甚だしき斯くして永久の平和は決して得らざる可し戰爭のなき處焉ぞ平和あらんや最上の平和を得るには戰爭の巷に彼等を屈伏し競爭場裡に凱歌をあげて日本人は彼等の誤認しつゝあるが如き劣等の人種にあらざる事を實力と威力とを以て示し彼等をして衷心より日本人を尊敬せしむるに非ずんば日本人排斥の聲は永久に沈默せざる可し而して此日本人の實力を發揮せんとするには多數の勞働者及實力ある競爭的奮闘者をドシ〱渡來して競爭場裡に勝利を制するにあり、●●余の見る所を以てすれば、富者の態々米國に來り以て財を散ず國家の不經濟之に過ぐるものなし、而して彼等は終に得る所甚だ尠なし官吏の視察亦た益する所少なく漸く二三ヶ月米國に止り少しく英語を覺ゆるに至りて忽ち視察地を出發す、其効果知る可きのみ要するに米國は大富豪が或は大貧困者の來るべき所にして大富豪者は直ちに大事業を始む可く大貧困者は競爭場裡に奮闘して勝利を期す可し當時渡米する者の如き僅かの小金を抱ゐて米國を見物し或は學校に入學す何の得る所かあらん再記す米國は奮闘者の行く可き所にして金を使ひに來る可き國に非ず世人多くは米國を誤解し米國に行きさいすれば遊び乍ら金が取れるかの如く思ふて來る者多し米國にても路上に金あるに非らず日本に於て勞働するよりも約三倍の勞働をして五六倍の賃錢を得るにあり日本や歐洲の如きのろき勞働は米國に見出す事能はざる可し。

斯く米國にては万事勞働と奮闘とを基礎として遊惰を許さず取得する所亦多し從つて教育なき者人格の低き者

は危險なる黃金万能主義に惑溺し金是生命の陋想に陷り人格の隨落し趣味の墜落し易き亦解するに苦しからず故に數多の日本學生は橫濱阜頭を去らんとするや遼遠の前途を夢み高尙の理想を抱きて渡米するも來りて勞働に時を經るや徒らに黃金の力に迷ひて勞働の目的を忘れ全く壓落して終生の勞働者に陷る者甚だ多し亦慨嘆の至りに非ずや余は特に云はんとす渡米者に必要なるものは旅金にあらず英語に非ず學識にあらず全く堅固なる意思と淸朗なる人格とにあり人往々にして渡米費用と生活費との多きを喞ちて躊躇す此等は歐洲漫遊者に必要なる條件なれども米國に於ける要件に非らず、亦斯種の人々は渡米せざるを可とす何となれば成効の望甚だ少なければなり、今や將さに四年半を經て第二の故鄕たるの感ある紐育を去らんとするに臨み一言以て友人に訴へんとす然れども人各々思ふ所を異にすれば之を以て万人の感慨となす能はず、只だ余が自ら經驗せる所自ら理想とする所自ら信賴する所を述て足下に呈せんとするのみ拾捨の權は只だ足下にありて亦た余の關する所に非ず、嗚呼風蕭々として易水寒く男子一度去て亦歸らず底の意氣を御互に抱きたきものに御座候。

紐育　三郎

小生は何時も氣の向いた時に一氣呵成に書きなぐり再び讀み直す事なく自分でも後から何を書いたか覺えて居ない位のものに付き充分御判讀下され度候。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

紐育の統計

▲外國より渡來して紐育港で上陸を拒絕せられる者の多數は勿論三等船客なれども上等又は中等客でも上陸を拒絕せらるゝ者が五百人中に一人ある由。

▲紐育に於ける財產を各市民に平等分配する時は、一人前三千〇四圓位のものなりと云ふ。

▲今年は米國が大不景氣で各會社で勞働者を解雇せる爲め勞働者は一時歐洲に歸省するもの多く一日に六千人（船八艘）もありと云ふ從つて來米汽船にて渡來する勞働者も減少し、以前は每日千五百人乃至千八百人ありしも當時は三百人乃至五百人ありと云ふ兎に角紐育へは歐洲通の汽船が每日數艘出入し各船に數百人の勞働者を持ち來しつゝあるなり。

▲紐育地代の高さは當然にして一哩四方が平均四億四十六万五千圓計りなりと云ふ。

▲紐育より出帆する船で荷物を送り出す事が一時間每に千三百五十噸。

▲紐育の圖書館にて東洋部には一万七百冊の書ありと云ふ。

▲紐育の人口增加は每月一万一千人計。

▲紐育には澤山の公園あり其中の中央公園は見積代四億百万圓ありと云ふ。

▲紐育より發荷する商品の價格は每週二千四百万圓ありり。

▲紐育の每日の死亡數平均二百二十五人、出產三百五十人。

▲紐育市の敎育費負擔額は一人に十圓八十錢。

▲紐育市で慈善會合が費す所每日二万二千八百圓。

▲紐育市にては小學校の爲めに學校を開いて居る間は每日二十四万二千圓

計を費しつゝあり。

▲紐育の人口は一平方哩内に十万二千八百人ふり然れども日中は諸近地より勞働又は會社へ通つて來るものある故商業の取引時間内には人口が此二倍位ありと云ふ。

▲紐育で拘引せらるゝもの男五人に女一人の割合。

▲世界中の電話は七百四十万位にして其中米國にあるもの六十八半%（五百六万九千計）を占め歐洲大陸には二百万位ふりと云ふ。

▲紐育には消防夫（上級官吏及機關士を取除き）二千九百九十六人ありて之を四等に分ち一級俸が一年に二千八百圓（千八百九十四人）、二級俸二千四百圓（二百九十四人）、三級俸二千圓（三百十三人）、四級俸千六百圓（四百九十五人）、ふり。

▲紐育市の衛生官吏が試驗して食料に不適當とふし没却する食料品が毎月百三十四万ポンドと云ふ。

▲紐育の石炭消費額一年に二千八十万噸計。

▲紐育市に供給する牛乳は八万六千ケ所の牛乳搾取所より來り遠きは四百哩の遠方より來ると云ふ。

▲紐育の中等以下の長屋にて五才以下の小兒の死亡數毎月約二千人。

▲米國全体にて販賣する出來合の洋服の男物の三分の一、女服の三分の二は紐育市にて製りたるものふり。

▲紐育市に昨年の人口增加十二万五千人。

▲紐育には市民二百七十五人に對して一人の小學校教師あり。

▲紐育より發送する荷物は多く英國へ向ふものにして昨年米國より英國への輸出額は十二億七千六百万圓。

▲紐育で殺人犯が毎年二百四十例計ふれども社會組織の複雜ふる爲め犯罪人を捕縛する事難く犯人不明のものが千九百年以來三百例もありと云ふ其他巧妙なる方法によりて殺人し社會や警察へ知れずして終るもの毎年少くとも十五例位はある可しと云ふ當地では能く殺人して屍を大暖爐に入れて燒く事ありさすれば嗅氣もなく骨も殘こらざる可し。

▲紐育の中等以上の旅館の室代は一日最下等四等より四十圓位のものあり。

▲米國人が昨年の夏に歐洲旅行の爲めに費せし所約三億圓計ふらんと云ふ。

▲巴里では昨年夏の來遊者約百八十万人にして十月に最も多く此來遊者の費せし所約四億圓ふりと云ふ。

▲小生の經驗にては紐育程新聞賣子の多きはなし近來紐育の警察は十才以下の男兒及十六才以下の男兒にして新聞賣子をふらんとする者は教育課より特別の免許を得ざる可からず又夜十時以後及び朝六時以前に此等の小兒の勞働を禁止し此等の小兒悉く胸に免許濟の記章を懸ける事とふりたり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

一寸貴下の御專門に關して

十五年間に三十人を出産したる一夫婦が紐育頃日の新聞にありたる故、一寸報知申上候夫は Gatofsky と云ひ露國生にして今年四十歳妻は三十二歳ふり十五ケ年間に三十人を産み其中十四人生存すと云ふ其出産時等左の如し驚く可き實例に候はずや。

一八九二年四月五日	結婚せり
一八九三年三月二十二日	双産
一八九四年	一人
一八九五年	双産
一八九六年	三人
一八九七年	双産
一八九八年	双産
一八九九年	双産
一九〇〇年	一人

一九〇一年　一人
一九〇二年　双産
一九〇三年　一人
一九〇四年　一人
一九〇五年　一人
一九〇六年　三人
一九〇七年　双産
一九〇八年六月十日　四人

＊　＊　＊　＊　＊　＊

紐育に於ける諸建築の宏大高壯なる事は世界に其比なく一寸其主なるものを擧ぐれば

建築物の名	階數	高サ
Equitable.	62	909 feet
Metropolitan.	46	657
Singer.	41	612
Times.	28	419
Park Row.	29	382

此最高建物六十二階は一哩の五分一强にして三十三の電氣昇降機を用ゐ勿論急行、並行等種々ある可し建築費二千万圓かりと云ふ。

此度紐育の富豪 Philipp なる人が精神病學研究の爲めに二百万圓近くの金を Johns Hopkins 大學へ寄附したり夫故全大學では此金にて最も完全なる Klinik を新築し又米國一流の精神病學者を招聘する事となり小生の研究所の所長 Adolf Meger 博士が轉任する事になりたり其の爲め小生の先生は建築物視察の爲め直ちに歐洲へ赴かれたり、御承知の通り米國にては富豪が學問研究の爲め多額の金額を寄附する事は當り前の事と相成り居り二百万圓位は少額の方に御座候、此 Philipp 氏は數年前に八百万圓を寄附して結核研究所を私設し毎年大冊の業蹟を發刊致し居候、Carnegie や Rockfeller 等の寄附は尙之より大なるものに御座候、日本にはこんな壯擧をやり得らる可き富豪も無之候へ共各其分に應じて慈善事業や學問界に貢献する習慣を作れば宜敷事と存候別に富豪の寄附のみを當にして之に依賴する次第には無之候へ共親が死して其財産を悉く子孫に遺すと云ふ習慣は米國には更に無之若し寄附金が少なき遺言狀を發見すれば寧ろ大に不思議がる程にして國異るれば習慣にも大差有之候。

○在臺北　千葉茂氏通信

（九月十五日發　仝月二十日着　小原生宛）

（前畧）　頃日神岡氏渡臺せられ着臺の節快談仕り御地の御模樣の大体を拜聽仕り候諸先生益々御研鑽の由こんな鬼界ケ島の樣な埴民地に來て見れば母校は矢張り懷かしく被存卒業當時の空想？急がば廻れなどとこんな遠い處に來て今更の如く慕母校の念禁じ難く候と申すものゝ乍去當院に參り候處各專門校卒業生の寄合にて（特に長崎、岡山など多く）候ままに決して女々しく暮し居らざる事丈け御心强く御思召され度候當院にては同級生渡嘉敷君耳鼻科にて柏原學士（京都大學出身）の下に大に手腕を振はれ已に定評あるに至り候小生は內科勤務にて稻垣博士の下に馬脚の一端としてこつこつやり居り候横井嘉丞氏（卅五年卒業）本年三月渡臺せられ當院研究室にて原生動

物學細菌學(特ゝ熱帶性)を研究致し居られ候當地には宮島博士と併び稱せられし斯學者木下嘉七郎氏(長崎出)在りしも去る十日本院にて遂に不歸の客となられ候此の方面には當地方病たる Amoeba dysenterie の多く收容さへすれば幾十人にても材料を得られ候位にて候へば仲々面白そうにて候其他金澤出身先輩の諸氏としては居ない樣にて中々居るものにて候先づ中川幸庵氏(廿七年卒業)は臺南醫院に牛耳を執られ陸軍々醫清水秀夫氏(卅五年卒業)は基隆にて活動せられ候先般横井氏と共に訪問致候處金澤ヘンヌキノ語調を以て快談を交へ候而も氏の官宅たるや高陵にして眼下に基隆を一眺し景望極めて佳良に加ふるに何よりの御馳走たる涼風衣を拂ひ恍然として亞熱帶地方の人たるを忘れしめ候基隆檢疫官福山可藏氏(卅七年卒業)は去る十日上京致され今度傳染病研究所に入られ候仝氏も當時在臺にて候ひし事故同窓四人大に食ひ大に談し申候清水氏は研學の餘暇琵琶の御勉强は中々凡人の及ぶ所に非らずとの事にて候其他軍醫小原德太郎氏(卅七年卒業)は臺北衛戍病院附にて在勤せられ候今度神岡藤一郎氏(卅九年卒業)臺中醫院眼科主任として高安博士の下にて積年研學の敏腕を振はるゝ事と存じ候頃日二三相集り候節母校と連絡を取り大に母校の名聲を擧ぐべく一つ同窓會と云ふ樣なものを設立しよじやないかなどの議起り居り候實際當地の事情と狀態は未だ充分內地に紹介せられ居らぬ事かと存ぜられ候(愚慮にては)尤も此度來る十月の縱貫鐵道全通式の節は數百の名士渡臺せらるゝ事故其後は遺憾なからんと存ぜられ候へども臺灣と云へば蕃國にて生蕃の居る處の樣に想像せられ候へども御存じの通り殖民地の改新開化の速力は實に驚くべきものにて候日進月步の醫學のろれの如く市區改正の如きは二三日見ぬ間に堂々たる一等街路は出來あがりロールエンヂンの轟き居ると云ふ樣な始末にて當臺北の如き數年前に下水工事は竣り目下淨水工事中に有之來る十月までには竣成の見込とか又何百萬圓にて中央研究所を出來かす何十万圓にて鐵道ホテルが出來る臺北醫院は數年計畫にて二百五十萬圓の改築、已に小生等の內科診察所は五萬圓にて出來あがり使用致居り候目下九萬圓にて病室一棟工事中(エレベートル附の最新式工事)にて候三四ヶ月中に御地南町の銀行やら生命保險會社の建物位のは早速と出來あがると云ふ始末にて候却說臺北醫院を一寸紹介申上げ候各科醫長は內科醫長稻垣博士仝迎學士外科醫長兼院長長野博士眼科醫長藤田學士產婦人科醫長川添ドクトル耳鼻科醫長柏原學士皮膚科尾見ドクトル齒科富澤ドクトル小兒科臼杵學士、各分科に得業士の馬脚二名宛有之其の下に當地醫學校卒業生(本島人)を副手として二

名宛有之候病室收容人員二百五名にして夏期は各科間に病室のヤリクリ烈しく時に論波となる樣な始末に候職員の食堂の如きは仲々氣の利きたものにて候しが今度の新築病棟の出來るまで病室と相成候位病室の不足を告げ圖書室娯樂室までも病室と相成外來患者本年最多數なりし日は七月廿七日外來患者數七百五十名入院患者と合計して一千七名なりし事有之候內科の如きは百五六十名の外來あるのは珍らしからず候七時より診察を始め十二時までに二百を診察致し約二分間に一名の比に候へば中々容易ならぬ多忙にて候殊に當地は內地と異なり檢血を要する患者多く其他の檢査物の多きと內地も同樣に候へば繁忙を極め候看護婦は七十餘名にて見習生二三十名に產婆講習生二三十名にて候總て寄宿舍に收容致し居り候看護婦の高級のものは卅圓位の俸給にて事務の書記などよりも上格にてすましたものに候事務員は官衛式だか何んだかゴタ〳〵穴居仕り居りヤレ調度局庶務局會計局事務局などと云つて各局に五六名宛の大男ごろつき居候併し之れ亦中々繁忙の樣子にて候却說醫學校の事も少々申上度又當地衛生狀態等も申上度候へども餘りに長文句と相成御研究の防げとも相成候へば恐縮至極に御座候まゝ先は是れ位にて擱筆致し何れ後便にて申上ぐべく候（後畧）

○松原三郎氏在米最後の通信

（九月十一日紐育發　十月十四日着）

前便松原氏か在米最後の通信あらんと思ひしに計らさりき本日復長文の消息あり而も是れ尋常一樣の消息にあらずして徹頭徹尾人格問題を反復論して縱橫餘す所なく社會人生に對する吾人の天職吾人の覺悟を闡明訓誨至らざる所莫し、吾人は氏か體得せる千挫不屈の精神を以て品性修養の根本思想に就て理論と方法を究め常識の涵養趣味の啓發を說き進んで意志の鍛錬と處世の眞髓を明かにして其實踐躬行を極力總鼓吹せらるゝに愈益敬慕感謝の念を禁ずる能はざるあり、而して這般の實行や普く古今に通して悖らず廣く中外に施して謬らざるもの、吾人は此好指針に順ひ向上的修養に力め初て淼漫限りなき社會人世を渡るの日あらん事を冀に樂む者あり

（金城療病院にて　八田生識）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

八田兄

愈々明朝紐育出帆
故郷を去るの思あり
多忙云はん方なし

紐育より　三郎

人格の修養

此度の十全會雜誌には小生の手紙が掲載せられ愚にもつかぬことが多く自分ながら呆れ居候就中人格修養に關す

る愚見有之あんなことを申し上げたかと今更思出し居候更に頃日來人格問題が日夜小生の腦裡に往來致居候爲め思はず筆が滑りたる次第にて小生は勿論斯の如きとを論ずるの資格なき一介黄口書生に有之候只だ人各々理想を描きて之に向はんとし各々趣味を抱きて之に接せんとするの性質あるものに候故小生も不敏ながら此後は幾分なりとも所謂人格の修養に勉めたきものと存候に付き今一應小生の愚見を申上げて兄の御示教と御訓誡とを得んとする次第に御座候間此手紙御一讀の后は何とかの御意見を御漏し下され度奉願候。

頃日は日本にも人格問題を論ずるの聲漸く高きに至りつゝあるものゝ如く感じられ申候是れ國家の慶事にして人道上の好徴なり世に之より高尚なる趣味はなきとと存候嗚呼人格なる哉夫れ日本の武士道なるもの英國の紳士道なるもの共に是れ人格の修養に候はずや兄よ悲哉西歐の物質的文化の吸収に忙殺せられて又他を顧るの遑なき過渡時代に生れたる生等は暗夜滔々たる激潮に放浪し足元の危き儘未だ天を仰ぐの餘裕なかりしなり偶々水上に微光のうつれるを見て思はず頭を仰向し初めて上に天あるを知り星なるを認めたる次第に御座候。

嗚呼人格なる哉崇高なる人格なる哉此の人格なくしては學識、地位、名譽、富貴果して何の意味かある申す迄もなく人格は議論すべきものに非ずして自ら修養すべきものなり他人へ法螺吹くべきものに非ずして自ら實行すべきものに候故小生も亦默して贅言を重ね申間敷候。

勇氣の修養

されど兄よ余等は自己の人格を修養するのみにて事足れるものに候や足下以て如何となす此困難にして古來成効せる者少なき人格問題に熱中す又何すれば他を顧みるの餘裕あるべきと仰せられ候はゞ夫れ迄のとに候へ共余の愚考によれば各自は各自の爲めに盡すべきのみならず尚ほ社會の爲めに盡すべき義務あるものに候はずやと感じられ申候若し果して然りとせば吾人は力を盡して自己の人格を修養すると共に又意を注ぎて社會の幸福を增進するとに勉めざる可からざるとと存じ昔時の高僧の如く深山に宣籠りて自己の人格を修養し悟を開くだけにては何だか物足らぬ心地せられ申候貴意如何に候哉奉伺候余は自己の人格を修養すると共に自ら社會の改良に從事せんとするの勇氣をも養ひ度き希望に候

今や社會の組織制度益々複雜して强者は弱者を壓倒し智者は愚者を輕蔑し富者は貧者を酷待せんとするの傾文化の潮と共ゑ世界の四隅に普及せんと致居候とは貴下も夙ゑ御同感のとと存候此時に當りて拱手我れ關せず焉となすは怯懦の甚しきものにして男子の本懷に無之とと存

しられ申候之に至り吾人は自己の人格の上に更に勇氣奮鬪とを並び修養せざるべからざるとと信じ候嗚呼勇氣なる哉奮鬪なる哉奮鬪的勇氣なき人格は枯れたる花に候はずや社會を益する所なき人格は亦終に何等の價値かあらん足下の高見如何に候や。

足下既に憂へらるゝ所ならん此人格と勇氣とは屢々並行せざるものに御座候人格ある人は自己一身を潔ふして敢て世上の濁流に近かず塵俗外に身を避けて風流を追ひ詩歌を樂しみて社會に又何あるを知らんとせず勇氣ある者は人格の修養を度外視し自己の名譽を得んが爲めに東西に奔走し自家の利益を得んが爲めに日夜奮鬪し箇人の地位を収めんが爲め絶にず筆論を盛にし口演を矢釜しくし人格ある者は勇氣ある者の盲動を嘲弄し勇氣に充つるものは人格修養者の無爲を指摘しつゝあるは現時の社會に於ける狀況に候はずや。

足下よ此處に申上候勇氣とは勿論情と義との結晶より拆出したる勇氣に御座候謙信が信玄に塩を送りたる的の胸底より涌出する勇氣に御座候徒らに弱者を壓制せんとする强者の怯勇と混同せられざらんとを信じ申候嗚呼同情と慈愛とより發動する勇氣は以て朝日に匂ふ山櫻に比すべく此物の憐を知る武士の勇氣を御互に修養し練磨致度ものと存候此の熱烈なる義勇と高崇なる人格とが調和して初めて吾人の品性を作り又社會の實用に供するを得べきもの歟と存じられ申候足下以て如何となす？

余が愛讀措かざる『實業之日本』の新年號に於ける宣言なるものを見るに余が意を得たるもの甚だ深し曰く年一年、歲月の進むに從ひ步一步我國運の發展を見るは吾人の大に快とする所なり近く吾が國民が世界の各所に於て如何に發展し如何に競爭し又如何に對抗せられたるかを見ば吾人は世界の競爭場裡に於ける我地位の如何に急進したるかを認識せざる能はず此位地は吾人が建國以來未だ曾て有したるとなき名譽の位地なり而かも此名譽ある位地は我國民の非常なる大奮鬪を以てするに非れば之を確保すると能はず而して國家の奮鬪は箇人の奮鬪に在り箇人の奮鬪は能く各自が自國の世界に於ける地位を自覺し此の自覺によりて更に自奮、自助、自立して各自の職責に全力を傾瀉するにあり吾人の地位の既に斯の如し乃ち最も健全にして最も有爲なる我國民の中堅たる者は此大勢の推移に先だち新時代に對する新生面を開かんが爲め吾人の旗を更に世界の競爭場裡に進めて世界的奮鬪の急先鋒たらんとを期せざる可からず此の二十世紀は二十世紀の事業を成さんが爲めに如何なる人を要求しつゝあるや則ち眞面目の人なり敢爲の人なり事業の人なり奮鬪の人にして一言すれば精力の人と存候余等青年は未だ

使用せられざる精力の一大貯蓄庫なり之を蘊蓄し之を鍛練して以て自己の人格を修養し社會の改良に傾注す亦愉快に候はずや。

足下及日本の同胞は悉く口を揃へて日本が既に世界の一等國に入りたるとを賞讃せらるゝとと存候申すまでも愛國心に强きと戰爭に上手なるとは既に一等國以上に卓立するとと存候然れども兄よ願くば一度來りて西歐の地を踏み其の國民の思想、生活の程度學問の普及研究の規模、實業の隆盛交通の便利等を親しく御一覽遊ばされ候はゞ盖し足下が現時想像せらるゝものよりも更に大なる偉觀に驚かるゝとと存候之を思へば日本は既に世界の一等國に伍したるに非ずして一等國として競爭すべき發足点に達したる迄のとに御座候故之より一等國に伍するを得るや否やは各自の覺悟と奮鬪とにあるべくと存候されど兄よ、乞ふ憂ふる勿れ各自に高潔なる人格を修養し不撓の勇氣を蘊蓄し以て世界の競爭場裡に猛進して奮鬪せば何ものか得られざるものあるべき又何處か達し得られざる所あるべき最後の勝利を得んとは明かなるとと存候足下に既に此の堅固なる御決心あるとと小生は夢更に疑ひ申さず候足下願くば自愛せよ。

常識の修養

されど兄よ余は歷史よ古來の英雄なるものを見るに高尙なる品性はあり熱烈なる勇氣はあり而して其の爲す所往々にして人の意表に出で滑稽を演じて所謂逸話なるものを遺す者多し此等は余等後輩の學ぶべき所に候や否や貴敎を得たきものと存候學者が研究に熱中するは可なり又熱中せざるべからずされども社會の常軌に外れたる滑稽的逸話なるものはあらずもがなのものには無之候哉。

此に於てか吾人は品性と勇氣とを修養する外に更に常識を修養するの必要あるには候はずや常識なき品性は舵なき滊船の如く其の往くべき所を知らず常識なき勇氣は鐵路を外れて猛進する汽車の如く其危險云はん方なし夫れ吾人の品性は客車の如く勇氣は機關車の如く常識は鐵軌の如きか、品性なき人格は只機關車が鐵軌の上を走るのみ何の目的かあらん、勇氣なき人格は機關車なき滊車の如く又進むと能はざるべし常識なき人格は軌道なき滊車の如く其危險言はん方なし之を調和せんと甚だ難くして亦必須のとに候はずや。

此に於て兄よ吾人が完全なる人格を得んとするには先づ眞面目なる品性を修養し之に熱烈なる勇氣を鍛練し尙ほ社會の常識を蘊蓄し以て社會人道と學界との爲めに奮鬪せざるべからざるとと存候貴意如何に候や。

人格修養の方法

此人格問題に必須なる品性、勇氣、常識の三大要素を如

何にして修養すべきやに就きては大に御高見のあるべきと存候間何卒御意見のある所を御漏し下され度奉願候兎に角余輩黄口の書生は自己の力のみによりて完全なる人格修養すると大に困難なるが故に偉人高聖を崇拜する可なり好文良書を愛讀する又可なり然れども吾人の精神は時々に變化する刺擊を加ふるに非れば感激すると尠し故に小生は毎月刊を更ゆる雜誌の可なるに若かずと思ひ種々鑒探仕候へ共悲き哉現時の雜誌なるもの多くは吾人の人格修養に有害なる軟文學を排列するに過ず此の間に小生は獨り『實業之日本』を愛讀致し居り候其他『成効』等も有之『活動之日本』は未だ手に致し不申候『實業之日本』は其の名の如く勿論實業家に愛讀せしむべき雜誌に候へ共人格の修養は實業家も醫士も學生も別に異りたる所なかる可しと存候此『實業之日本』も全く小生の理想に合したるものにては無之候へ共小生が今迄讀みたる雜誌中にて最も小生の理想に近きものに御座候間是非一二冊なりとも試みに御閲讀下され度此段特に御勸め申上候此は人格修養上近來稀なる好雜誌と存しられ申候に付き兄も此の雜誌の愛讀者となられたりとの吉報に一日も早く接せんとを待ち申上候。

足下よ申す迄もなく人格修養に先づ必要なるは人格修養の必要を自覺するにあり之を痛切に自覺するにあり候既に此の自覺なくんば何ぞ人格修養の趣味を得んや此の趣味なくんば何んぞ修養の勇氣を得んや此の勇氣なくんば焉ぞ人格を修養し勇氣を鍛練し常識を蘊蓄するとを得んや足下に此の自覺と趣味と勇氣とあると足下の既に宣言せられたる所なり唯だ足下の謙讓なる未だ其の高見を多く語らず爲めに足下の高敎に浴すると能ざるを遺憾とす足下よ乞ふ其高敎を垂るゝに吝なる勿れ足下以て如何となす??

○加藤寛氏端信

（十月四日蔚城發　十月廿一日着八田氏宛）

貴院記念繪ハカキ難有奉存候小川先生御重症との報に接し悲みの極度に達し申候御病氣は何でドーいふ經過と云ふ事を御報知願上けます實に惜しい人返す〳〵も惜しい先生です小生は憎まれ子世にはびこるの逆道理を眞哉とシミ〴〵感じました切に萬一の御全快を期し慈顔に接するの機を希ふて止みませぬ君知る慈母の餘命は先生の賜物なるを」

羽根田君と云ふ人又舶來せり殘念なから未た逢はず

西洋料理もモーアキ〳〵だ先日松久君と二人で米食を拵へて見たが箸でなく匕ですくい上けては一向始まらぬ

君洋行などするもんぢやない僕は眞にコリ〳〵した大金

と時間に對する報酬としては得物がつまらんワケテ親持ちは親でも死んだら其ころ大變だ
君御望みならば來て見給へ君等の豫想以外だサヨナラ

○久保武氏消息

（十月廿日京城發十月廿三日着八田氏宛）

（前畧）小川先生御逝去の悲報に接し驚愕致候尙態々御送被下候北陸新聞紙上に於ける先生御臨終の記事「……」を讀んで覺にず暗涙に咽入り候

噫御母堂樣始め御家內樣の御落膽は如何……而も御令息猶年幼なりと云ふに至ては人生豈此上の不幸やある我等先生の敎を受け先生の門下より出てたる者擧て此際先生御家族の慰安の道を講じ其高恩の万一に酬ゐ奉らざるべからすと存候只生は身今遠く韓國に在り徒らに東望して心を痛むるのみにて何等其意を果す能はず眞に斷腸の思に不堪候

先生の門下先生の敎室より出てたる者として先輩岡田、岡本、藤岡諸兄を始め本下、越野等の諸君あり殊に最も因緣深かりし貴下のあるあり、小生同時代の者としては關屋死し森田帝都に在るのみ、願くは兄等內地殊に金澤に住する人時々御訪問の上直接御遺族樣を御慰め申し又何かと御力盡しの程伏して奉懇望候而して又生等の深き厚き同情の一端をも御傳へあらん事を乞ふ

小生今は境遇こそ異なれ恰も洋行留學せる者と同樣なる感想いたし候材料としての屍體はなきも生體としての材料は豐富無限に候、即ち生は今專ら Lebende Koreaner に就ての研究撿測に忙殺せられ居候特に語學の研究には獨逸人も少なからされは中々便宜に有之候而して前途益々樂しく比較的幸福なる今日あるを得たるも畢竟亡き恩師と且又金子恩師の賜に外ならず御鴻恩終始忘るゝ事無之候

今にして言ふは甚た奇ならんも最初生の母校を出てゝ婦人科に入りしは眞に婦人科學としての婦人科を志望すと云ふよりも寧ろ小川先生としての婦人科を學ばんと欲せるに胚胎せるのみ、もし母校婦人科敎授として小川先生なからんか生は特に婦人科を撰はざりしや保すべからず實に金澤醫專校に小川敎授のありしは一の最も偉大なる名譽なりき精華なりき異彩なりき

生固と感情に深く且つ應々事に偏するの性僻あり其母校に入り初めて先生の聲咳に接し高風に浴してより深き德望高き品性を慕ひ敬するの餘り早く既に三學年の末より先生の婦人科に入り先生に師事すべく志を定め申候而して校を卒へて後約一年朝夕先生の懇篤なる示導を辱ふし敎訓に浴す而も一朝忽然として解剖學に身を轉す……

人或は其輕卒浮薄を笑はん、然れども先つ先生を學はんとし先生の婦人科を志望せるは殆んど人と學問とを混同せる極端なる生の偏見に出で候故若し單に此考を以て永々〳〵金澤の地に留まること或は却て生の得策ならざりしやも知るべからず

兎まれ先生の高風品格に傚はんとし先生を理想とせる生の主旨本領は終始一貫して今も尙往年先生の膝下に在りし時と異なる處無之候（境遇は違ふとも）

嗚呼〳〵生の先生に負ふ處如斯し先生に此大恩を報するは今徒らに悲嘆の言を呈するよりも寧ろ生が研究を續け唯此業の大成を期するより外無之と益精勵致居候

噫……

＊　＊　＊　＊　＊　＊

當方大韓醫院も愈來る廿四日開院式有之皇帝御臨幸相成り未曾有の盛事を致すならんと存候目下設備に大多忙を極め居り候又解剖室丈は別に小なから新築致候

貴下近況如何、松原君近々歸朝母校就任の由生は母校の爲め双手を擧て慶賀す母校は此篤學の士を凡ての情實を離れて大に厚遇し大に優待せさるべからず!!! 生沼君も既に洋行し先きに畏友北兄及敷波兄の錦衣歸朝せらるゝあり頃者橋本君ドクトルを得て歸り加藤君亦然るべき!!、名古屋の石森も一二年中には洋行し得るならん、洋行は中々大流行、大に奮發すべしだ、拙者もドーセ西比利亞一跨に一度行て見て來度いと思ふ

京城大和町三丁目五十四　武

＊　＊　＊　＊　＊　＊

會報

○叙任及辭令其他

▲宮內省▼

叙從五位（五月三十日）　正六位醫學博士　上坂熊勝

從六位勳四等功四級　鶴見金十郎

（各通）　仝　小原芳雄

叙正六位（六月三十日）　從六位勳六等　宮田篤郎

叙正六位（九月十日）

▲內閣▼

黑田眞岳

（各通）

杉本恒治
山崎清吉
坂本信一

任陸軍三等軍醫

（各通）

海津四郎
猪飼史郎
貴島善兵衛

任陸軍三等藥劑官（以上、六月一日）

（各通）

永井人雄
佐藤武
鈴木修一郎
市川久多
山田茂樹
太田勘市
林秀雄
原季
赤尾肇三
栗原治三郎
柿澤雅一
山川宮三
武藤匡一
朝日昊

任陸軍三等軍醫

（各通）

吉田繁治郎
佐々木靜
大澤誠一
井口爲四郎
寶達佐市

任陸軍三等藥劑官（以上、六月二十九日）

任金澤醫學專門學校教授

阿部莊二

叙高等官六等（七月十日）

任陸軍三等軍醫（八月廿八日）

山中房次郎

任海軍中軍醫（九月廿五日）海軍少軍醫正八位

長井運男

▲文部省▼

四級俸下賜　教授　櫻井小平太

四級俸下賜　教授　金子治郎

六級俸下賜　教授　村上庄太

（以上、五月三十一日）

任金澤醫學專門學校書記

笹井仁作

十級俸給與（六月二日）

補金澤醫學專門學校生徒監　教授　阿部莊二

八級俸下賜（七月十日）

任金澤醫學專門學校書記　第四高等學校書記　川島俊

八級俸給與（八月一日）

三級俸下賜（九月十六日）　教授　小川勝陳

三級俸給與　助教授　金原三郎

依願免本官

任金澤醫學專門學校助教授　中島愛次

五級俸給與（九月二十二日）

▲陸、海軍省▼

近衛歩兵第二聯隊附兼陸軍々醫學校教官陸軍三等軍醫正　岩田一

免本職併兼職補陸軍軍醫學校教官（四月三十日）

第九驅逐隊附海軍中軍醫　三野賢吉

免本職補吳水雷團附（五月十五日）

歩兵第七聯隊附陸軍三等軍醫　西村順八

免本職補工兵第九大隊附

輜重兵第九大隊附陸軍二等軍醫　小島顯治

免本職歩兵第三十六聯隊附一等軍醫職務心得被仰付

歩兵第三十五聯隊附陸軍三等軍醫　長谷眞美

免本職補輜重兵第九大隊附

陸軍三等軍醫　佐々木純一郎

第十師團軍醫部々員被免　補騎兵第二十一聯隊附（以上、五月二十九日）

音羽軍醫長海軍大軍醫　武田正壽

免本職補吳海軍病院附（六月三日）

歩兵第四十二聯隊附陸軍三等軍醫　一宮重之助

免本職補廣島衛戍病院附

歩兵第五十二聯隊附陸軍二等軍醫　高田重忠

免本職歩兵第六十三聯隊附一等軍醫職務心得被仰付

歩兵第四十六聯隊附陸軍三等軍醫　青木市次郎

免本職補長崎重砲兵大隊附

補歩兵第五十九聯隊附　陸軍三等軍醫　佐々木靜

補歩兵第七聯隊附　陸軍三等軍醫　市川久多

補金澤衛戍病院附　陸軍三等藥劑官　大澤誠一

大阪衛戍病院附被仰付　陸軍三等藥劑官　寶達佐市

陸軍一等藥劑官　澁谷十郎

姫路衛戍病院附被免　補宇都宮衛戍病院附

輜重兵第六大隊附陸軍一等軍醫　戸田伊代治

免本職補歩兵第二十三聯隊附

補歩兵第十二聯隊附　陸軍三等軍醫　原季

補歩兵第九聯隊附　陸軍三等軍醫　朝日昊

補姫路衛戍病院附　陸軍三等藥劑官　井口爲四郎

補歩兵第四十五聯隊附　陸軍三等軍醫　栗原治三郎

臺灣歩第二聯隊附陸軍二等軍醫　佐野愛二

免本職補歩兵第二十四聯隊附

補歩兵第四十四聯隊附　陸軍三等軍醫　太田勘市

歩兵第六十九聯隊附被仰付　陸軍三等軍醫　林秀雄

歩兵第七十聯隊附被仰付　陸軍三等軍醫　吉田繁治郎
小倉衛戍病院附被仰付　陸軍三等軍醫　鈴木修一郎
歩兵第三十五聯隊附被仰付　陸軍三等軍醫　永井人雄
歩兵第七聯隊附被仰付　陸軍三等軍醫　山田茂樹
歩兵第五十六聯隊附被仰付　陸軍三等軍醫　柿澤雅一
歩兵第五十三聯隊附被仰付　陸軍三等軍醫　佐藤武
歩兵第二十二聯隊附被仰付　陸軍三等軍醫　山川宮三
小倉衛附病院附被仰付　陸軍三等軍醫　武藤匡一
歩兵第七聯隊附被仰付　陸軍三等軍醫　赤尾肇三

（以上、六月三十日）

吳海軍病院附海軍少軍醫　小出貞次郎
免本職豐橋乘組被仰付　海軍少軍醫　小野醇吉
免海軍軍醫學校練習學生補舞鶴海兵團附　陸軍三等軍醫　山川宮三

（以上、七月三日）

補歩兵第二十二聯隊附　陸軍三等軍醫　佐藤武

（七月十八日）

歩兵第五十三聯隊附被免　補歩兵第五十五聯隊附　陸軍三等軍醫　增田貞吉
歩兵第七聯隊附陸軍一等軍醫
免本職補工兵第一大隊附　春田久太郎
歩兵第六十九聯隊附陸軍二等軍醫
免本職歩兵第七聯隊附一等軍醫職務心得被仰付　陸軍三等軍醫　林秀雄
補歩兵第六十九聯隊附

（以上、七月三十日）

◎本年第二回陸軍々醫學校學生トシテ八月一日入校セルモノ、中本會特別會員ハ左ノ如シ

陸軍一等軍醫　高岡榮
陸軍二等軍醫　松山俊夫
陸軍二等軍醫　高伊三郎
陸軍三等軍醫　長谷眞美
陸軍三等軍醫　正木美澄
歩兵第五十六聯隊附陸軍一等軍醫　國分金城

（以上、八月五日）

休職被仰付
第三師團軍醫部部員陸軍二等軍醫　山本幹雄
免本職補名古屋衛戍病院附　陸軍三等軍醫　山田茂樹
歩兵第七聯隊附被免　補歩兵第四十四聯隊附　陸軍三等軍醫　武藤匡一
小倉衛戍病院附被免　補歩兵第十四聯隊附　陸軍三等軍醫　永井人雄
補歩兵第三十五聯隊附

（以上、八月十日）

鐵嶺衛戍病院附陸軍二等軍醫　速水昇
免本職補歩兵第八聯隊附　陸軍一等軍醫　橋本監次郎
補伏見衛戍病院附

歩兵第十七聯隊附陸軍一等軍醫　佐伯亮齋
免本職補青森衛戍病院附　（以上、八月二十五日）
休職被仰付　歩兵第二十八聯隊附陸軍一等軍醫　小林茂樹
近衛歩兵第三聯隊附被仰付　陸軍三等軍醫　山中房次郎
（以上、八月二十八日）
歩兵第一聯隊附陸軍一等軍醫　關口通太郎
免本職補野砲兵第十五聯隊附
騎兵第二十一聯隊附陸軍三等軍醫　佐々木純一郎
免本職第十七師團軍醫部二等軍醫部員心得被仰付
歩兵第五十八聯隊附陸軍三等軍醫　土屋重俊
免本職補清國駐屯軍病院附
重砲兵第三聯隊附陸軍一等軍醫　池田耕
兼補深山衛戍病院長
陸軍省醫務局課員陸軍三等軍醫正　村山有
韓國駐劄隊衛生材料臨時檢査官ヲ命ス
（以上、九月十五日）
歩兵第五聯隊附陸軍二等軍醫　溝口美代志
免本職補高田衛戍病院附
歩兵第二十五聯隊附陸軍一等軍醫　河村多郎
免本職補山砲兵第一大隊附
第七師團軍醫部部員陸軍二等軍醫　井上隼雄
免本職歩兵第二十五聯隊附一等軍醫職務心得被仰付
第九師團軍醫部員陸軍等二軍醫　瓜生尹重
免本職歩兵第三十五聯隊附一等軍醫職務心得被仰付
歩兵第十三聯隊附陸軍三等軍醫　內海友七
免本職補久留米衛戍病院附
（以上、九月十七日）
補小倉衛戍病院附　陸軍三等軍醫　鈴木脩一郎
伏見衛戍病院附陸軍一等軍醫　橋本監次郎
免本職陸軍省出仕被仰付陸軍省醫務局附ヲ命ス
（以上、九月二十一日）
陸軍三等軍醫　赤尾肇三
歩兵第七聯隊附被免補歩兵第三十五聯隊附　（九月二十九日）
佐世保海兵團附海軍大軍醫　土田久三郎
免本職特命被仰付　（九月十日）
吳海軍病院附海軍大軍醫　武田正壽
兼補吳海軍病院看護衛練習所教官　（九月十五日）
免大和乘組補吳水雷團附　海軍中軍醫　長井運男
（九月二十五日）

▲臺灣總督府▼

臺灣總督府醫院醫員　中川幸庵
臺南醫院長事務取扱ヲ命ス　（八月二十九日）

▲石川縣▼

石川縣金澤病院醫員ヲ命ズ（四月三十日）　鷹見義郎
依願職務ヲ免ス（五月二十八日）　金澤病院醫員　小泉永宣
依願職務ヲ免ス（六月五日）　金澤病院醫員　村山常三郎
石川縣立金澤第一中學校醫　齊藤房治
願ニ依リ學校醫囑託ヲ解ク
月俸金參拾圓給與　金澤病院醫員　齊藤房治
依願職務ヲ免ス　金澤病院醫員　吉田宗一
石川縣金澤病院醫員ヲ命ス　舘保二
（以上、六月三十日）
石川縣金澤第一中學校醫ヲ囑託ス（七月三日）　丹羽直
依願職務ヲ免ス（七月七日）　金澤病院醫員　齊藤房治
依願職務ヲ免ス（七月九日）　金澤病院醫員　細田榮
依願職務ヲ免ス　金澤娼妓病院醫員兼檢査醫　本濃觀造
石川縣金澤病院醫員ヲ命ス　七五三龜吉
月俸貳拾五圓給與　金澤病院醫員　伊藤喬
（以上、七月十五日）
石川縣金澤病院醫員ヲ命ス（八月十日）　藤井一雄
依願職務ヲ免ス（八月二十五日）　金澤病院醫員　神岡藤一郎
石川縣金澤病院醫員ヲ命ス（八月三十一日）　玉森法靈

▲本校▼

細菌學授業補助ヲ囑託ス　醫學得業士　池田菱吉
解剖學授業補助ヲ囑託ス　醫學得業士　佐口榮
雇申付　押野輿吉
（以上、五月三十一日）
依願囑託ヲ解ク（六月六日）　外科學副手　村山常三郎
外科學副手ヲ囑託ス（六月廿六日）　醫學得業士　高木琢磨
依願囑託ヲ解ク（六月三十日）　講師　村木維夫
依願囑託ヲ解ク（七月四日）　內科學副手　齋藤房治
依願囑託ヲ解ク（七月十三日）　眼科學副手　吉田宗一
生理學講師ヲ囑託ス（七月十四日）　石坂伸吉
內科學副手ヲ囑託ス（七月十六日）　醫學得業士　丹羽直
眼科學副手ヲ囑託ス（七月二十日）　醫學得業士　舘保二
教務課主任兼庶務課學生課員　助教授　松田菊治
教務課主任兼庶務課員ヲ免ス
教務課主任ヲ命ス（八月四日）　書記　川島俊
兵式體操研究ノ爲メ上京ヲ命ス　助教授　松田菊治
（八月十日）
體操副科柔道教授方ヲ囑託ス　藤森千春
體操副科劔道教授方ヲ囑託ス　中村余所吉
（以上、八月三十一日）

産科學婦人科學講師ヲ囑託ス　山田謙治
年手當金九百六拾圓給與
兵式體操科教務ヲ囑託ス　佐復源太郎
（以上、九月九日）
生徒課主任ヲ命ス（九月十日）　助教授　松田菊治
兵式體操科教務兼生徒課員事務囑託
依願囑託ヲ解ク　南部彰義
囑託事務勉勵ニ付手當トシテ金參拾圓給與
雇申付　柴野順吾
病理學副手ヲ命ス（以上、九月十四日）

○特別會員動靜錄

○敷波重次郎氏　仙臺醫學專門學校解剖學教授の仝氏は曩に文部省留學生として三十九年二月出發、獨國ウユルツブルヒ大學に於て、後ライプチッヒ大學に轉じ益々研鑽に勗められしが爰に留學の期滿ち去る六月中旬無事歸朝せられたり

○生沼曹六氏　三十一年卒業後東京醫科大學生理學教室に入り大澤教授の助手として研學多年斯學界に夙に定評ある所なるが兼て數年前より慈惠會醫學專門學校に教鞭を執りしを以て今度仝校より獨國留學を命ぜら九月十五日鵬程に上られたり

○渡孚貞氏　數年前より愛知縣豐橋病院副院長として敏腕を振はれつゝありし氏は今夏仝地方人士の懇請を容れ豐橋市より二里を隔れる田原町田原病院長の職に就かれしが施設着々機宜に適ひ益々令聞高しと云ふ

仝氏よりの近信（九月廿四日發小原生宛）中、三河地方の本會特別會員動靜につき報じ越されたれば爰に一節を掲ぐ

田中正鐸先生　既に御承知の如く西尾町に於て西尾病院を經營せられ令名遠近に響き居れり

中野玄次君　小生の後任として豐橋病院副院長に就職さるゝ事に約整ひたり

辻村耕夫君　豐橋市呉服町に於て開業、患者數市内仝業中屈指の中にあり

中野源一君　北設樂郡御殿村に門戸を張られ好評あり

福島可輔君　西尾病院の醫員たり

江守武君　御油に於ける寶飯病院副院長たり外科を以て其名高し

原久雄君　豐橋病院醫員として精勵せらる

高井魯一君　原君と共に豐橋病院醫局に於ける二傑たり

其他愛知縣下としては他に多數の仝窓散在する事と存じ候何時かは一堂の下に會し度き者と希望罷り在り候

○橋本監次郎氏　曩に獨乙國民賢大學に於て「ドクトル」の學位を得、猶研學を積まれたる氏は八月歸朝、伏見衛戍病院附被仰付れ、幾もなく陸軍省出仕に補せらる

○横井喜亟氏　臺灣總督府台北病院細菌研究室に於て熱帶性么微生物學の研究に餘念なしと云ふ

○細田榮氏　金澤病院宮田外科に於て令名ありし氏は夏七月、北海道函館渡島病院（横山軫氏の）耳鼻咽喉科主任として赴任

○上野忠氏　細田氏の前任たりし氏は弘前市に於て開業

○山田虎一氏　六月金澤監獄醫を辭し鄕里越後に於て開業

○齋藤房治氏　頭腦明晰と篤學精勤とを以て夙に令聞高かりし金澤病院佐々木内科の仝氏は七月越中高岡市東病院内科主任として赴任せられたり

○渡邊彊氏　鄕里越後にて開業

○正木美澄氏　軍醫學校專攻學生として八月再び入學せらる

○村山常三郎氏　六月金澤病院外科醫員を辭し歸省

○田中基保氏　六月金澤市櫻木病院醫員となられたり猶氏は余暇母校眼科教室に通ひ研究を繼續せられつゝあり

○五井康平氏　母校外科副手として研學に勗められし仝氏は七月初旬福井病院内科醫員として赴任

○吉田宗一氏　金澤病院眼科醫員を辭し金澤監獄醫とならる

○眞澤貞一氏　母校眼科教室に於て研學中の氏は今夏石川縣能美郡根上村にて門戸を張られたり

○山田謙治氏　本會特別會員なる仝氏は九月小川教授の欠を補ふて本校產、婦人科の講師囑託をうけさせらる氏もと本校の第四高等中學校醫學部と稱へしとき教諭たりしことあり後本市に於て業を開き止善堂病院又は山田病院の稱の下に夙に令聞高く又醫政機關或は醫育のことに直接間接瘁されたる實に尠少ならず今や多端なる身邊を省ず推して吾人が薫育の煩を甘受し給ひしもの實に千謝に値すべきものあり

○松田菊治氏　醫學部時代臨床講義場教務課主任の要職に就かれてより茲に十余年間、教務及び學生課のことに當り老練の手腕と犀利なる處理とは等しく人の畏敬する處、また本會雜誌部委員として盡瘁せられし事尠少なりとせず今夏校務の變動に伴ひ主として体操教官の外、生徒課主任に轉じ阿部生徒監の下に學生監督の事務に鞅掌せらるゝことゝなれり

○川島俊氏　新に本校書記に任じ松田助教授の後をう

けて教務課主任となる

（ヨシ生）

第五十號所載特別會員動靜錄正誤

頁	段	行	誤	正
一一〇	下段	八	辻水	辻本
一一一	上段	一二	屋當祖	屋富祖
一一二	上段	一	卅六年	卅五年
同	同	二	六歲	七歲
同	同	二〇	胸裏	胸裡

級友敷田君を吊す

▲ア、敷田君！君の訃に接してより、迅、數閱月梧葉空しく散りて刻一刻秋は其落莫の度を加へつゝあり、君は未だろが苔新しき墓標の下靜に眠りたまふのである。

▲吁、實に意外でした、君が長逝の報に接せやうなどは。早う既に四年の昔だ、ともに、手を携へて母校の門に入りては、而して又俱に袂を列ねて、母校を辭すへき覺悟をも有して居た、又共に醫海の渺茫を力漕すへくも。

▲けれども、けれども、それは只一片の夢に過なかつた。君には遂に病痾の犯す所となつたのです、杜鵑血を咯くの初夏、君は、病窓連夜の惡夢に呻され玉ひし事そも幾干なりしぞ。

▲然れとも吾人は未だ失望もしなかたです、落膽もしなかつたです。只君の快癒を待つたです、全快も祈つたです。露になやめる尾花の、そよ吹く風に跳ねかへる樣に、醫藥の數滴は再び君の奮鬪力を永久に復活すへき確信をさへ持つたです。

▲しかし々々々、其れも遂に空想に終つたのです。君が病魔は急に其猛威を逞うし、遂に死の冷かなる朦氣は、攀昇す可らさる幾重の檣壁を君と吾人の中間に設けたのです。

▲中秋幾臆の星光は、常に蒼空に羅列してゐる、併し々々一度軌外に逸したる流星は再びもとの星座には歸つて來ないのである。吾人同級百個の椅子は恒に充實して居る、しかし、々々々、君の淳朴なる姿影は、永劫に其間に見出すことが不可能である。

▲那谷寺池畔、紅葉影鮮なるの邊、晩秋の一日を惜みしも夢であれは、臥龍山上新樹風冷かなるの邊、初夏一日の淸遊を試みしも夢てあつた。濟々堂裡の談笑、ストーブ圍緣の奇語、ア、それは星霜尙淺き今日君を忍ふの語り草となつたのである。

▲吾人の見たる君は實に質朴寡言の人であつた、又同時に着實履行の人であつた、吾人は未た壇上に號叫叱咤する君を見ない、併し又全級の冷笑を買ふへき浮薄の君を

も認めない、要するに君は中庸の人であつた、しかも眞面目に目的物に向つて勇往邁進すべき意志の堅固を保たれた。

▲君には大鵬の志も有つたろう、蒼龍の思もあつたろう、併し君は未た宿志に一指をも染めずして空しく逝かれたのです、卒業の榮を眼前に扣へながら、醫海の燈台を思尺に望みながら。

▲君も嘸かし殘念でせう、無念でせう吾人も亦實に殘念です、君が飛躍の雄姿に接せずして別れたのは。

▲併し君、君をいそしみ玉ひし養母の御愁傷は奈何でせう、君に信頼したまひし眷族の御痛恨は如何でせう、省みて茲に到れば、君も實に、九腸寸斷の思がしたでせう。

▲孤雁聲冷かなる床上、君が垂乳根は嘸かし長夜の夢につかれ玉ふ事であろう、虫聲唧々たるの草影、君は徒らに悲噴切齒の涙に沈ませ給ふであろう。

▲實に絶代の痛痕事です、天、而已に無常、地も亦、無常、而して天と地の造りしすべても君には無常であつたのである。

▲吾今筆を按じて、瞑目すれば、君の英姿髣々去來するものを覺ゆ。希くは君よ冥せよ、吾人永劫に君の靈を吊ん。

（翠生）

恩師小川教授の遠逝

恩師小川教授は慶應元年茨城縣結城の名門に誕生せられ、夙に東京醫科大學を卒業し更に婦人科及小兒科學を研鑽して其蘊奥を探り、明治廿七年本校に赴任以降、其俊英なる學才を揮て、孳々として教鞭を執らるゝ事幾と十數年、其間殊に本會雜誌部長として斡旋盡瘁せらるゝ所多かりしが、本年五月以來不幸二豎の襲ふ所となり卒に九月中旬可惜四十有四歳を一期として空しく白玉樓中の人と爲らる、惋惜悲嘆何物か之に加へん。

先生資性高潔にして敦厚、敢て俗塵に衒はず、權勢に阿らず、至誠を以て世に處し、信義を以て人に交り、温讓恭謙頗る聖人君子の風尚あり、出ては後進の師表として衆庶の敬重を博し、入ては家庭の柱礎として親近の欽慕を檀にせらる、宜なる哉其一度訃音の傳達するや四方悄然として考妣に喪するが如く歔欷慟哭臻らざるなし。

先生常に文學を唯一の嗜好とせられ、詩歌に堪能にして、機に滋み、時に應じて、其吟囊の紐を解て自ら無聊を慰籍せられしと云ふ、其優雅なる

胸懷、瀟洒なる心事、洵に瞻仰す可からずや。

嗚呼、先生未だ春秋に富み、前途有爲の身を以て空しく中道に殤殃し、而も東西を辨ぜざるの幼兒と、恩愛窮りなき老母とを貽して一朝茶毗の白煙と化し去らる、惆恨慘烈眞に其胸奥を揣摩するに餘りあり、倘し夫れ天年を假さば前途の光明大に信賴すべきものありしならん、遮莫、先生既に遠く幽明境を隔てらるゝ雖、其崇美なる人格は長へに赫奕として吾人が心裡を照晰して、吾人の思想と行動とを刺戟し以て薫化せしめずんば罷まざらん。

今や先生逝て又先生なし、是れ獨り余等の不幸なるのみならず、實に斯界の一大不幸と謂ふべし、吾人は先生が既往の鴻績を追憶して哀悼の情に堪へず、茲に謹んで赤誠を捧げて弔意を表す。

○阿部先生を迎ふ

時方に秋高うして農人充實の収穫に雀躍するに當り、吾人は茲に偉大なる人を得て喜びを共にするを得たり、他なし文學士阿部莊二先生其人に在るなり。

仰々醫道の世に於けるや如何、苟も文化聖代の今日、社會は日進の勢を以て多事の域に進まんとするに際し、其の社會に負ふ責務從つて益々重大ならざるを得ざるなり。然り醫は肉体の疾病を治癒し、併せて靈的方面に於てもあらゆる腐敗を治め以て風敎道化の實際的指導者として人の先驅たるべきは今更言を俟たざるなり。而かも今や一世の人心漸く安に伴れ、悲しむべき投機心は浸々乎として瀰漫し、却りて道德的向上心は步一步退化するの傾きなくんばあらず、是識者の全力を擧げて精神修養の急なるを號叫する所以のものなり。翻つて世の醫たり師なる人の此の間に所する果して如何ぞや、或る一部は其の重大なる本末を忘却し自ら此の誤れる時代思潮の渦中に投ずるもの豈になしとせんや。

吾人は第二の國民なり、吾人は第二の醫師なり、切に此の風潮を痛嘆すると共に從つて吾人の負へる責任の大なるを自覺せるもの、其の希ひ執らんとするは風敎改革の劍、其の從はんとするものは道德的向上の道なり。

顧るに吾人は未だ學尙淺く德從つてをさまらず、動もすれば一部者の失を以て測らざる誤解を世人に買ふ事なきにしもあらず。當局者又之れに鑑みる所あり、去歲生徒監なる要職を設け、學博く德高き良先生を得て、專ら一校の風紀及び倫理訓育の實を擧げんとす。

阿部先生は實に此の至大なる責任を擔ひて茲に吾人に臨み給へるなり、先生の吾校に於けるもとより喋々を要する所にあらず、必らずや吾校は先生によりて着々化に就き國家有用の材を出し、大に面目を施さん事瞭然として疑ふべからず、今先生の履歷を伺ふに實に次の如しと云ふ

新潟縣平民
阿部莊二
明治九年五月生

明治三十二年七月第四高等學校第一部文科卒業
明治三十二年七月東京帝國大學文科大學哲學科入學
明治三十五年七月同上卒業
明治三十六年一月東京私立京華商業學校講師（英語科）
明治三十六年四月東京私立大成中學校講師（修身科）
明治四十年十二月中央幼年學校教授囑託（論理學）
明治四十一年七月任金澤醫學專門學校教授
補金澤醫學專門學校生徒監

即ち先生は前任諸學校に於て、既に、修身倫理の要職を歷任せられ居らるゝ事吾人の將來に於ける運命に負ふ多き先生に對し、大に意を强うするに足る。且つ更に喜びとする所は、吾人の尤も關係深き、四高御出身にあらせらるゝ事なり。三年の長日月、金澤に於ける先生が學生々活は、如何に先生が吾人を率ゐて其實を擧ぐるに資すべきぞや。由來德敎の事導者敎に被導者即ち之に則るに非ずんば、其實を擧ぐると難し、然れば茲に吾人はこの良先生を得たるを喜ぶと共に、自ら一大決心を以て、共に相戒めざるべからず。是れ先生に對する務たると共に又本務たり。

謹んで一言先生を迎ふるの辭となす。

○金原助教授を送る

突如なる先生の辭任、吾人はかなしみよりも寧ろ驚を以てむかへられた。而して又先生は辭任發表後數日ならずして、上都の途につかれたのです、丁度九月二十日公園紅葉山麓に於ける、四年生が代表的紀念撮影を御名殘とし、敢て一片の送別會を營むへき暇をも籍し給はなかつたのです。先生就任以來歲未だ深からずと雖も既に五ヶ年の歲月を敎養の任に在した。湯目先生を送りて二歲今又同氏を送り、吾人舊恩の師續踵此地を去らせ玉ひて、寂莫の情に堪へぬものがある。且つ先生詩囊豊に、かつて二雨會に長とし、誌上芳詠に接せし事數度、今師の先生を惜しむと共に、又文の先生ををしむの想切なるを覺ゆ。謹て先生を送り併て御健祥を祈る。

○中島助敎授を迎ふ

天高く氣澄み、七旬の長期鍛錬したる活力の將に發動

せんとするの好季、茲にわれ等は、中島助教授を迎ふるの榮を得たり。

聞く先生、氣鋭、春秋に富ませらるゝと、願くは、向後本校に於ける教育と、わが十全會の發展に資するに、敢て、充分の訓導と、助力とを與へられむ事を、期待して、やまざるものなり。

以て、迎ふるの辭となす。

○弓術部報告

一委員

本校弓術大會記事

時は之れ櫻花既に枝を辭して藤花未だ咲きやらずも青苔將に黛然として滑かなる初夏の候、腕に覺の老練家と早雄の若武者、腕を叩いて大會今や遲しと待ち倦みたる五月三日は愈々本日となれり走せ來る者、はや會場に集ふ、會場は幔幕引きめぐらし來賓席は右手にしつらへ、生徒席には觀衆已に滿ち〳〵たり。

八時を以て開會を報じぬ、安土は清淨、的は新月、養由が秘術、八朗が弓勢、各々得たる道にして、今日を晴れの手前を見せむと各々手頃の弓箭を帶し、的を睨んで射かくる箭は風を射切つて高鳴し恰も虫の飛ふが如く蒼龍の雲を叫ぶに似たり、弓弦の響、山河を震はし滿場既に一變して修羅場となる、果然として起る拍手は何ぞ、發矢と的に命中の響か、得意なるあり、悄然たるあり、千差萬別中々に勇ましかりき、いでや當時の勝敗、記して記憶に備へむかな

△点取競射△（尺五寸的、五手）

	計	V		IV		III		II		I		
二等	25	0	0	10	5	0	5	0	0	0	5	寺田
	55	10	10	10	0	10	10	0	5	0	0	延川
	40	5	0	0	0	10	15	5	5	0	0	石丸
	10	0	0	5	0	0	0	0	0	5	0	和田
一等	35	0	10	10	0	0	0	5	10	0	0	中川善
	55	10	0	10	5	10	10	0	5	0	5	角田
	20	5	0	0	10	0	0	0	0	5	0	田中義
	15	0	5	0	5	0	0	0	0	5	0	茨木
	20	0	10	0	10	0	0	0	0	0	0	影山先生
	25	0	0	5	10	0	0	10	0	0	0	小幡
五等	25	0	0	0	5	0	0	10	5	5	0	新谷
	40	0	0	0	10	0	10	0	5	10	5	田島
	10	0	5	5	0	0	0	0	0	0	0	丸山
	15	10	0	0	5	0	5	0	0	0	0	吉川六

																				三等		
																四等						
20	20	10	25	35	25	35	25	35	5	0	15	30	15	20	15	40	30	20	40	45	25	
0	5	5	10	0	0	0	0	15	0	0	0	0	0	10	0	10	0	0	5	0	5	
5	0	0	0	5	0	5	5	10	0	0	0	10	0	0	5	5	15	15	0	10	0	
0	0	0	5	0	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	10	0	
0	10	0	0	10	5	10	0	0	0	0	5	0	5	0	0	5	5	0	10	10	0	
0	0	0	0	10	0	10	0	5	0	0	0	5	10	0	0	0	0	0	5	5	0	
5	0	0	0	5	0	5	0	0	0	0	5	5	0	0	0	0	0	0	5	0	10	
0	5	5	10	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	10	10	0	5	10	5	
10	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	10	5	0	5	0	0	5	
0	0	0	0	0	5	0	5	0	5	0	0	10	0	0	0	0	0	0	10	0	0	
0	0	0	0	5	15	5	10	0	0	0	5	0	0	10	0	0	0	0	0	0	0	
金子	近藤時	吉川友	田中三	小木	赤松	浦	松田先生	村上先生	宮村	内藤一	富永	柴野	絹川	近藤益	磯田	奥山	柳町	成田	中川久	大西	宮澤	

													二等		三等							
	2	五等 3		一等 7			1						5	3	4	2	1	計				
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0	0	×	×	×	V	數取競射△△△	0		
×	×	×	×	0	×	×	×	×	×	×	×	×	0	×	0	0	×			0		
×	×	0	×	0	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0	0	×	×	IV	（尺的、五手）	0		
×	×	×	×	0	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0	×	×			0		
×	×	×	×	0	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	III		0		
×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0	×	×			0		
×	×	×	×	0	×	×	×	×	×	×	×	×	0	×	×	×	×	II		0		
×	0	×	×	0	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0			0		
×	0	0	×	0	×	0	×	×	×	×	×	×	0	×	×	×	×	I	〔×印不的中 ○印的中〕	0		
×	×	0	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	0	0	×	0	×			0		
中川久	柳町	大西	成田	奥山	磯田	内藤一	宮村	富永	絹川	近藤益	柴野	赤松	松田先生	村上先生	小木	浦	近藤時			宮（小便）		

五寸的片箭競射

宮澤　吉川六

計	V	IV	III	II	I	
2	×0	××	××	0×	××	吉川六
1	××	××	××	××	×0	田島
2	00	××	××	××	××	丸山
	××	××	××	××	××	新谷
	××	××	××	××	××	宮澤
1	00	××	××	××	××	小幡
2	×0	0×	××	××	××	影山先生
3	××	××	00	×0	××	延川
2	××	××	××	××	00	茨木
	××	××	××	××	××	和田
	××	××	××	××	××	寺田
2	××	××	××	××	00	石丸
3	××	××	××	××	00	角田
1	××	××	0×	××	××	吉川友
	××	××	××	××	××	田中三
1	××	××	××	××	××	田中儀
	××	0×	××	××	××	中川善
	××	××	××	××	××	金子

金的片箭競射

浦　晴二

三校連合各撰手數取競射（尺的、五手）

（一）は金澤一中、（高）は四高、

計	V	IV	III	II	I	
3	×0	0×	××	0×	××	奥山
3	××	××	0×	×0	××	本間（一）
2	×0	××	××	××	0×	高田（高）
1	××	0×	××	××	××	不破（一）
4	00	00	××	0×	0×	木谷（高）
3	00	××	××	×0	0×	角田
5	00	00	00	××	××	金田市（高）
3	××	××	××	0×	××	中川善
2	00	00	××	××	××	中村（一）
1	××	××	××	×0	××	越川（一）
4	××	0×	00	××	0×	石田（高）
1	0×	××	××	××	××	石丸
4	×0	0×	××	××	0×	小木
1	××	××	××	0×	××	越村（一）

紫電一閃戰端茲に開かれしは何ぞ、是れ實に本日第一の華として幾多の健兒が腕を撫し、齒を嚙みて各其の全

勝を祈りし第四高、金澤一中、本校連合各撰手數取競射也いづれも金城に於ける一騎當千の勇士なれば姿勢端正にして仇矢いと少し、衆、掌に汗して其妙技に驚けりかくて月桂冠は遂に四高の占むる處となる勝者左の如し

一等　金田市（高）

二等　石田（高）

三等　小木（本校）

源平紅白勝負（數取競射、尺的、一手）

紅軍	白軍
×× 小幡	×× 宮澤
×○ 奥山	×× 浦
×× 木谷（高）	×○ 影山先生
○○ 金田市（高）	×× 茨木
×× 安達（來賓）	×× 和田
×× 城西（同）	×× 越川（一）
○× 佐々木（同）	×× 延川
×× 丸山	×× 小木
○○ 角田	×× 村上先生
○× 中村（一）	×× 柴野
×○ 越村（一）	×× 大島
×× 本間（一）	×× 赤松
×× 田中	×× 大西
×× 松田先生	×× 新谷
×○ 寺田	×× 不破（一）
○○ 土師（來賓）	×× 田島
×× 中川	×× 石丸
×× 石田（高）	×× 吉川

計十一本（勝）　計一本（負）

本日朝來天候曇にして寒からず暑からず雲は日光を遮りて的を反射せず大會には却て一大好日なりしも、俄然正午より一變して一滴二滴、雨公の落ち初めては、いよ〳〵懸念の思に堪へず晴れかしと祈れども益々降り來るのみ、あはれ的場は雨露の叩くに任かされぬ嗚呼天焉ぞ無情なる、さわれ意氣軒昂天をも衝かん荒武者達なればなどて左ばかりの妖雨厭はんや、降りしきる雨を冒して源平競射を行はれたり、起ち代り入り代り出で〳〵演ずるは來賓諸氏、各校撰手、本校の勇士よりなる源平の武者なり、いづれも腕に覺の殿原なれば、鳴り響く弦音、颯然たる鷲の羽音は、いふも更なり、飛鳥も翅を収めて、四隣を今や戰の氣はいに包まれたり、勇ましとも勇まし

來賓点取競射（尺五寸的、二手）

一等

計			
5	20	5 / 0 (II)	佐々木君
0	0	10 / 5 (I)	安達君
0	0		
0	5		

	二等	三等	計	
土	0	10	10	II
師	10	0	10	
君	0	10	10	I
西	0	0	0	
君	0	0	0	

嗟吁、鬼をも、ひしぐ剛の者も、空漏り、臺顯れ、地は水に浸り、的、雨太鼓となりては。やり切れず、憎むべき雨は止まばこそ、刻一刻、降りに降り頻りて、いつ晴るべしとも思はれず、起坐すら既に困難なり否茲に至りては之れすら既に絶望なり況や形式を準法して、ありし古の術を忍ぶに於てをや茲に於て豫定の射割競射は後日に讓り中止の止むなきに至りぬ遺憾も亦甚し、天の無情も亦酷の極 時將に午下二時過くる半

本日の競射は之にて終りとなりぬ、一同は病理室に集合し本日の華とうたはれし諸氏、即ち自個の見地よりは得意者、他人よりしては名譽者なる勝者諸君の爲めに賞品授與式は擧行せられたり、式終るや各校撰手慰勞を兼ね茶話會を催せり苦茗をすゝり粗菓に口を飽かし、高名話しや失敗談、口角に泡を飛ばして惡評にまれ、好評にまれ己がむき〳〵甚大の歡を盡して遂に大會の局は結はれたり。

雨は小止みもやらず、時は三点を報じてやゝしばし。

因にいふ同点又は同數にて等級に差異あるは同点競射の結果斯くは定めしもの也

弓術師範楠先生逝かる

先生夙に斯道の蘊奥を窮めらる、然して我校に師たること實に久し、其間、薫陶の熱心なる一日の如くなりき、先生昨年春より二豎の襲ふ處となり專靜養せられしも、天先生に命をかさず遂に本年四月十六日遂に黄泉の客となり給ひぬ、悲しい哉。

因に記す弓術部有志相謀り先生の靈前に聊か香華を手向けん事を議す當時微志を納れて出金せられたる諸氏は左の如し

醫科第四年級

寺田久十郎　吉川友信　岡勝重
田中三彌　藤崎榮吉　關根平
宮村誠一郎　河合勝　金子義長
田島耕平　新谷成三郎　大西慶明
竹内義一郎　赤松省　不破才三郎
太田得郎　中川善松

醫科第三年級

小木秀時　成田高仁　德久恒治
小暮喜一　宮澤德治　天野彦次
宮城篤珍　中川久成　春山盛道
山本直枝　富家光雄　吉井直次
丸山直友　國吉眞才　茨木忠俊

醫科第二年級

堂坂友作　白石福三郎　吉川六郎

原田秀三　矢吹清　近藤時男
重野諦　磯貝一簀　浦晴二
近藤益成　奥山義盛　小幡一志
和田政範　西村福太郎　岡久雄
高田信弘　大村義一　角田眞一

醫科第一年級

島中勝壽　富永富久三　延川靖
中原德彌　磯田昇平　石川清治

藥學科第二年級

河村賢吉　中山富次郎　平井義清
廣瀨支哉　松永清一　上田内藏亮
田中義一　宮島卯吉　毛戸四郎
中村重好　本庶英献　治多信章
吉田實

藥學科第一年級

田中退三　五十嵐健太　大島時

○本校紀念式

五月十一日午前七時半より職員生徒一同濟々堂に集合、第八回紀念式を擧行す。校長は式辭を述べ一ヶ年間に於ける教職員の異動、多年の宿望たる本校新築計畫の經過等につき說き給ひ、生徒總代伊藤哲一氏祝辭を上り、一同萬歲を三唱して閉式したり

○第二回陸上運動會

記錄係

一　會場前記

○この學校の運動會と云ふと、ろれは大した評判で、新聞が爭つて内容を知らせる、市人が余興のタネを聞きたがる、老若男女貴賤都鄙、緣日盆正月を待つやうに、知らぬ人が頭を下げると思ふと、どうか菓子券と云ふ寸法で、前景氣は素晴らしいものだ、何がさて、專門學校の運動會は、やつと昨年產れた許りの、骨も肉も固まらないが、珍らしいので、產れる早々人氣はどつさり、幸に虫氣もなく育つた今年の誕生日に、五月の空、連日の雨より晴れ、朝風つめたきに忽ち響く中空の煙火の音は。

○廣坂を通ると醫四館の掲示がある、小立野にも貼つてある、素早いなと舌を卷く。

○病院正門前の大通りには地を抽出ること百尺竿頭、大旗ゆら〳〵翻り、蜘蛛手に萬國の彩旗を引張つて、中々振つて居る。

○綠門を入ると大に意裝を凝した噴水が出て居る、屋上にも旗が立てゝある、長い會場までの順路には、クラス館の廣告畫に、十分慰めらるゝのである。

○炭灰の道をどろ柳に沿ふて進むと、クロバアの綠軟く

右手に醫四館標本陳列館がある、戸口には幾百の下駄が散亂して居る、御苦勞であつたは説明係さ。

○カスミ會のスタンプ捺印所には絶えず五六の會員が忙殺せられて居た、エハガキは余り感心したものは無かつた、來年は繪畫研究を目的の先生達、少しばかり奇拔なのを出し給まへ。

○三年のクラス館は四間に三間の大建築、正面は御定りの杉の葉で、小旗を引きまわし、室内には卓子に白布を敷て、中央の大花瓶に折柄のつゞし、山吹松に藤、中々凝つたものだ、館前に實躰鏡を据つけて財布を絞り、少年音樂隊を傭つてきて無邪氣な奏樂に來賓をもてなして居た。

○次は草樂亭の見世物小屋を拜觀した、水族館とは珍らしい、金魚、ウグイ、鯰などは愈々珍らしい、來年は乾物博覽會でも開いては奈何。

○御次ぎの醫四館建築は相かはらずへたで、牛乳屋の店に寄留して居る傾があつた、然し閑靜な場所であつたから來客はいつも客止めの好景氣、餘興の大風呂敷には大分釣られたやうだ、館内專賣のアイスクリーム、コヒー、サンドウイッチと云ふ西洋物の供給は大に人氣に投じたが、家族御揃の連中にはいさゝか閉口したと、こぼして居た連中もあつた、さうだらう天下何物がロハで貰へる物があらう、僕等施主の資格はないからね。

○醫二館は驚く勿れずつと東の杉木立にふさわしき亭を建てゝ居る、燒板の袖垣、竹垣、四阿の風情もよし景品も上等で、一々級の優勝者を貼り出すは機敏だ

○醫一館はMA形のアーチに正面の大頭顱殊に人目をひき、天幕張りの室内は蒸暑かつたが、終始發音機は意氣な音色を響かせて居た。

○午前中は淋しかつたが、ドンを合圖に午後の會場は身動きもならぬ大混雜で、無慮三万と註せられ、日はカン〳〵と照りつける、黄塵は朦々と舞ひ昇る、人の氣、草のいきれ、些の涼味なき會場に、見られもせぬ運動を見に來るのは、少し物好きのやうでもある。

○各級餘興のうちで、餘興と云へば本校運動會の餘興は興行趣味を帶びて居て眞に獨特だが、僅かの費用であれだけの人を喜ばせるのは感心ぢや、眞面目腐つて行列の生耻ぢさらすのは閉口だからな。

○批評や會場の記を詳細に記せば澤山あるが、その必要も無からう、年々整頓して行く運動會の設備に、何か來年は鬼でも笑はせる珍趣向を考へ給まへと、前書き件の如く、次に記錄同人の活動寫眞を御目にかける。

二　會場後記

嗚呼實に愉快！だ　僕は、今、不律を執り上げて、第二回運動會記をものさんとしつゝあるのだ。僕の手はわなゝいて居るであろう。僕の足も震へて居るであろう。併し、心配し給ふな。震顫麻痺でもなければ、ヘルドスクレローゼでも無い。僕の心臟は煮きつてゐるのだ。僕の神經は興奮の極度に達して居るのだ。

春の贅をつくした櫻花も、既に昨日の夢と過去りて、空しく其形骸を地に委して、新綠漸く濃く、卯辰の連山を包み太陽が全線の征矢は、其間に刻み込まれて、新綠彌々深く、潤色倍々艶に、と見る一陣の麗風吹き來りては、幾多の波紋を現し、消てはたち、起ちては消ゑ、春を送りし老鶯の眠も、夏を迎ふる杜鵑の夢も、はては、此自然の搖籃の中に護られて居るのであろう。

涼風一陣、颯と、衿をかすめた一刹那、僕は思はずも深呼吸を初めた。綠精を飽和したる空氣が、兩肺に充滿したのだ。若しもより精巧なる技術を有するを得ば、吾人の肺の切片には、炭末といふ穢ない沈着物の外に、コロ、フイールの美麗なる或物を見出し得るかも知れぬのだ。

一脚の机を圍んだ二人。相手は矢張青章の御一人、勿論本日の會記を分擔しやうといふので。

「あゝ君よい天氣だなア」と、振顧れは

「あゝよい天氣だなア」と、の鸚鵡返し。之れは全く自然の語勢だ心の反響なのだ。

實に不思議ぢアないか。北國と云つたら雨を連想する、雨といふたら北國を想像する、一日降つたら二日は降る、二日降つたら三日は續く、此が相場だ、それに昨日久濶て降つた雨が、未練もなく今日の天氣！　これが不思議でなくて何だろう。天氣が續いた揚句は降る、降つた揚句は晴れる、それが天變地異だ、其間に物質の循環があるのだ。萬有の保育が意味さるゝのだ。と、云ふ冷かなる科學者の觀察に詐れはそれ迄の事、いやそれにしても不思議は不思議だ、或は去年のうめ合せかも知れぬ、申譯かも知れぬ、そこにかくれたる神意があつて、吾人に私に幸するのでもなかろうか。か樣に思ひつゝけると本日の盛會も想像さるゝ。僕は大なる味方を得た樣な氣にもなつた。百倍の原動力を增した樣な氣もする。

二發の花火に、温き殘夢が破れて、刎起きた、而して本日の紀念日を祝するため、學校へ登校し終るや、否や、會場へ駈足で來た、其間が漸く三時間、これが千秋の思ひがする、否寧ろ千春と云ふた方が適切かもしれぬ。これが喜悅の極致だ。歡樂の結果だ。浦島だつてこれ以上は思ひは味ふまい。

僕は夢から現、現から夢と、幾多變遷から目覺めて初

めて自我に皈つた。正面には一段と高い會長席甫め、來賓席、之に次いて醫一醫二醫三醫四館艸樂館等環狀に繞圍し、場内の滿艦飾は例によつて例の如く、其他化學應用の着色液、數種、之が一定の投藥によりて忽然變色を來す等、場内の粧飾いたらざるなく、各級の欵待も亦いたらざるはない。

時計愈迫りて、場内益々騷然。紅章白章青章はては黄章の各委員が、右往左往の混交雜踏！

九時三十分愕然として見上げられたる花火は既に會の整頓を報告した。群集は見る〳〵埒の外へ蝟集した。茲に第二回大運動會の序幕が切つて落されたのだ。

僚は忙しく鉛筆を削り初めた。それぢや書かう。

第一回　二丁競走　はやスタートに立ちたる勇士拾數名、何れ劣らぬ健脚揃ひ、中にも吉川氏はハンヂキャップを與へられたる名譽のつは者、とは云へ二丁と云へは僅か一周、三四週ならは兎も角、此短距離中にこき拔けるのは、なか〳〵難事だ、それにしてもと云ふ好奇心に驅られたる觀衆の視線は、齋しく傾注せられた。吉川氏其人の決心も、亦眉目の間に讀みうるのだ。空銃一閃其結果がかうだ。（二十三秒）

一着　武者素行　　二着　泉　吉守

三着　吉川友信

第二回　戴囊提灯競走　傾きかけたる戴囊、落さじと保持するスタイルの可笑しさ、場内しばし哄然。（一分三十秒）

一着　酒井碩治　　二着　杉山貞二

第三回　二人三脚　たをるゝ者、躓くもの、ある中に、宮城初めより克く整調。（三十二秒）

一着　宮城篤珍　茨木忠俊　　二着　高橋房太郎　赤松省

第四回　武裝競爭　（一分十七秒）

一着　岡勝重　　二着　赤松省

三着　鈴木忍

第五回　四丁競走　（一分十二秒）

一着㊀吉川友信　　二着　赤祖父廉三

第六回　戴囊スプーン競走　（五十五秒）

戴囊の落易く、スプーンの球の落やすき、共に理屈や口では行かぬ業、面白き程にもなけれど、又捨難い氣ももする。

一着　牧田泰　　二着　加藤健

三着　池上豐

第七回　化學競走　伏せ置かれたる問題を拾ひ、尙途中散在せる紙片中、これに相當せる化學記號を蒐集し去るもの、學術的競技として、滿場の喝采を博し得た。

（四十五秒）

一着　島　亮二　　二着　深瀨　源造

三着　中山富次郎

第八回　重荷競走　八貫余の重荷をになひ走るもの

（三十三秒）

一着　北川　文松　　二着　安澤　一清

第九回　二丁競走　（三十秒）

一着　中村喜太郎　　二着　副田　實成

第十回　戴囊提灯　（一分十秒）

一着　野崎　利吉　　二着　大岩　五郎

三着　岡崎虎次郎

蓄音器は遠く醫一館の彼方より響き亘りぬ。運動は回を追ふて益々佳境に進み、吾人の意氣益々昂然。

第十一回　カッポリ競走　一定所に到りて草鞋を穿き、尙進みて、竹筒製のカッポリを穿ちて走るもの、新案興味津々たる競走、哄笑内外に溢れ、拍手到るに隨ふて起る、實に珍無類の妙技、殊に湊氏の早藝には、三嘆ををく能はざるものであつた。（二分）

一着　湊　久助　　二着　野島　利一

三着　坪井　清澄

第十二回　二人三脚競走　宮村組、甫めより扳く事數十歩、人をして啞然たらしむ。（三十三秒）

一着　宮村誠一郎　高儀　京治　　二着　戸澤和一　安澤一清

第十三回　救急競走

第一動令により、患者出走、第二動令によりて其場所に止る、同時に介者二人擔架を持て疾走し、所定の患者に一定繃帶を施して運搬し去るもの、これ又學校の性質上、多大の趣味を喚起せしめしや必せり。

一着　鈴木　琢磨　小林唯四郎　城谷　隣賢　（一分二十五秒）

第十四回　一分間競爭　赤帶を附せられたる吉川氏、超然先登に在りて、遂に桂冠を戴きぬ。（一周弱）

一着㊀吉川　友信　　二着　近藤　益盛

三着　中原　德彌

第十五回　戴囊スプーン競走

一着　中山富次郎　　二着　村松　純吉

三着　島田　靜雄

第十六回　槌擲競技　鐵槌振りなげ競技にして場の中央に地をトし、劃線に到りて順次之を行ひ、遂に堀氏に及んで、之を四十七尺四寸に投じ、富家氏之を四十八尺に抛ち、人胆を寒からしめ、今や、斯界のチャン城谷氏赤顱卷の扮裝悠々乎として立現はれ、むづゞと計り鐵槌

をふり下げ、一呼吸の后、投すること五十尺七寸、拍手急霰の如く起りて、滿場囂然たること暫時、されど惜むへきは、三尺のハンヂキャプ、遂に富家氏に輸するに至りぬ。

一等　富家　光雄　　二等㊀城谷　隣賢

三等　堀　孝信

中食のベルが鳴り亘つた。一時間の休憩なのだ。僕は衣匣の菓子笏を探り出して、クラス館廻りを甫めた。（余興の詳細は雨橋氏の健筆に委す）今日の胃は茶囊だ。コーヒ囊だ菓子囊だ。便々たる腹をかゝへて、又椅子に戻つた。「いや黑くなつたなア」と、僚の御挨拶只さへ黑い上に、日に直射せられたから耐らぬ、一盃聞し召した樣な面だと。ナーニ管ふものか。

第十七回　化學分析競走

動令により出走、一定所にいたり所定藥液中に。試藥を投し其變態によりて原液を推考分析するもの、藥學科特異の學術的競技、しかも嶄新として褒すべきだ。

一着　島　亮二　　二着　中山富次郎

三着　瀧澤忠一郎

第十八回　戴囊提灯競走

一着　若槻　寛隆　　二着　富家　光雄

三着　西村福太郎

第十九回　四丁競走

第二周より金子氏の驀進、遂に決勝点に入る。（一分二秒）

一着　金子　義長　　二着　名取　博三

第二十回　武裝競走　（一分三秒）

一着　河合　勝　　二着　赤祖父廉三

三着　上野　善造

第二十一回　旗取競走　（七分）

一着　中村喜太郎　　二着　小幡　一志

三着　須賀　芳篤

第二十二回　障害物競走　（一分十五秒）

北陸運動界の名物男義長金子氏、ハンヂキアップを與へられて、矗乎と立ちたる其雄姿、あゝ天晴なる武者振、萬場の視線は、齊しく其赤帶a向て集注せられた。空銃一閃、電光の如く邁進し、一物又一疊、座ら猿猴の樹枝に攀緣するか如く、越にては拔き、拔きてはこに、あはれ優勝旗は、又も氏の双掌に確乎と握られて居た。

一着㊀金子　義長　　二着　矢能　孝次

南風いよ〳〵劇しく、白雲の一團、那邊よりとなく飛翔し來り、天涯全く覆はれて、太陽の直射も支障せらるゝに到つた。併し運動會には誂向、負惜みでもない、全くだ。

第二十三回　片足競走　一手を以て一足を擧上し、片足にて疾驅するもの、周の半より開始せられた。

一着　萩原　忠　二着　馬場　庄江　三着　服部　暢助

第二十四回　戴囊提灯競走　（一分五秒）

一着　富家　光雄　二着　國吉　眞才　三着　北川　文松

第二十五回　化學競走　（四十五秒）

一着　宮川　濱　二着　瀧澤忠次郎　三着　大村政太郎

第二十六回　二丁競走　（二十六秒）

一着　赤祖父廉三　二着㊀金子　義長

第二十七回　戴囊スプーン競走　（四十五秒）

一着　奥山　義盛　二着　富家　光雄　三着　福村　深

第二十八回　二人三脚競走　（三十秒）

一着　弓立　義一　二着　名取　博三　高橋房太郎　小田　善壽

自轉車曲乘　實に突飛なものだ、これは醫三館の余興なのだ、本市坪田商會內星野氏其人なのだ。一曲一藝、能く神に通し、縱橫自在の乘廻し、克く萬場の拍手を買ひ蒐めた。

第二十九回　重荷競爭　（二十五秒）

一着　堀　孝信　二着　才田　猶次

自轉車曲乘　本市名古屋商會內前田氏、これ又滿場の拍手喝采の裡に終りをつけた。

第三十回　六丁競走　（二分二秒）

副田吉田高儀諸士又斯界の御大將計り、實に見事な勢揃ひだ、勝敗奈何と觀集の應援も亦盛んだ、第三周迄の吉田氏の先登、實に頼母子かつた。併し次周の混戰の結果がかうだ。

一着㊀副田　實成　二着　吉田　宗一　三着　高儀　京治

第三十一回　跛者戴囊競走　（四十九秒）

片足に高下駄を穿ち、囊を戴きて疾驅する樣、得も云はん方なく、抱腹絶倒、滿場を呻らしたる珍無類の競走！。能くも笑せたるものかな。

一着　國吉　眞才　二着　相馬甲五郎

第三十二回　救急競走　（一分四十五秒）

一着　宮村誠一郎　中川　善松　小林　進

第三十三回　戴囊提灯競走

一着　高橋房太郎　二着　大井藤次郎

三着　中川富三郎

太郎次郎三郎の期せずして、順着せしは、又一奇と稱すべきなり。

たちまち嘲哢たる樂隊の群集の背后に起つた。これ醫三人探しの發見せられたのであろう。刻がいよ〳〵迫りて、今が日の眞盛り、場内漸く色めき、茲に、

第三十四回　一哩競走　の豫告が現はれたのだ。彼々とつめかけたる、人垣はいやが上に密に、頭は頭と重り、肩は肩に接して、押すな〳〵の大雜踏招待席には、新にマッケンジー夫妻を初め、歴々たる貴賓紳士、これは又立錐の余地もなき有樣、宛で、細胞の浸潤其儘だ。黑すんだ眼は其核だ。萬を數ふる其核が、今齊しく或一点に、集注靜止の狀態にあるのだ。

スタートに現はれたる、健兒の面々何れ劣らぬ豪の者。筆もつ吾さへ氣が焦燥するに、仍々、落着くは彼等の姿勢。幾多戰場に踏み馴れたる勇者だ、胸に刻みし確乎たる勝算に、心の激動が壓へつけられて居るのだ。兎に角に數十歩の堤徑が、彼等と吾との間に顯然と、見え透く樣だ。一發の銃聲は、異常の强音を以て、ひゝき亘り、こゝに混戰の第一歩がふみ出された。周一周、回數の木札が一定旗下に投げ出され、戰は益々郡に、喚聲倍々切に、一贏一輸の后、北村氏の先登によりて、第八周に入り、中村高儀之と接觸を保ち、應援彌々迫り、第九周に入ると見るや、奮然として起ちたる中村氏の、瞬時にして先登を制し、拍手喝采天地を震撼せん計り。（六分五十五秒）

第一着　中村喜太郎
第二着　北村一清
第三着㊃高儀京治
第四着　島津最澄
第五着　和田政範

自轉車曲乘　比々野氏（名古屋商會内）

操作輕妙、茲に到れはろも極致だ。一技一藝吾人克く心胆を寒からしめ、拍手するの余暇を與へざりしもの、確かに氏の手腕と褒すべきた。

第三十五回　カッポリ競走　（二分二十五秒）
一着　才田猶次　二着　奥田
三着　服部暢助

第三十六回　分析競走　（四十八秒）
一着　瀧澤忠一郎　二着　島亮二

第三十七回　二人三脚競走　（三十二秒）
一着　赤松省　畠中　二着　弓立儀一　山崎

第三十八回　障害物競走　（一分十五秒）

ハンヂキャップを與へられたる高儀氏と、酒井氏との一勝一敗觀者をして思はず、手に汗を握らしめた。

一着㊀高儀京治　二着　酒井謙二郎

第三十九回　來賓競走　（戴囊提灯）

眼にも止らぬ早藝あれは、落してはならじと大事そうに歩み給へる御仁もあり、紊れかゝりし、場内に笑聲あふるゝ計り。

一着　大桑氏　二着　田中氏
三着　今村氏　四着　古谷氏
五着　織屋氏

第四十回　職員競走　（一分十五秒）

隱れさせ玉へるを、强ひてと引きいだされ給ひて、慍りもし玉はず、莞爾と、スタートに出で立ちて、戴囊提灯にあらゆる愛想を、蒔き玉へるは、うれしくも、又、可笑しくも思はれた。

一着　野崎氏　二着　鷹見氏
三着　田中講師　四着　石川教授
五着　村山氏

第四十一回　各學校撰手競走　（六町）（二分三十秒）

奈何なる故にや、各學校の撰手の數少なかりしは、又遺憾なりき。

一着　石川縣師範學校　松森
二着　石川縣立第二中學校　波佐波

第四十二回　高等學校撰手競爭　（六町）

一着　宮田　二着　鈴木　三着　岡田
四着　藤盛　五着　富田

自轉車二人曲乘　比々野、星野両氏

車上の逆立等曲藝枚擧に遑あらず、滿場水を堪へたるが如くゝ至らしめたるもの、全く、諸氏の誇りとするに足るなり。

第四十二回　各級撰手競走

愈々最后の競技に差かゝつた。所定の服裝をまとひ、悠然として迫らす、内には必勝の妙計を弄して、外には嫣然微笑を湛へ、鐵腕を挙りて、突立ちたる凛々しさ。中に就て金子氏、吉川氏、相並んて、斯界の宿將、中村氏、又、名聲嘖々たる致將、廣田、矢能氏、又、新進の重鎮を以て目せられ、これ、將に龍虎相搏つの大活劇！各級の應援は、團一團、彩旗打振りて、其示威的運動を開始し、應援の歌、些時は耳も聾せん計り。

軈て、用意の號令は、耳新しく傳はるや、環衆一時に鳴を靜め、動令一發應援再び沸き返つた。回漸くすゝみて、第三周に入り、杉内氏、第一先登に進み、廣田中村氏之に雁行、金子吉川氏之に追隨して、第四周に入り陣形乱れて、廣田中村金子吉川の順に至り、其半に達するや、

廣田氏遠く離れて、第一先登を保ち、あとや勝負の數定れると看る一殺那、中村氏猛然として邁進追踵し、滿場の喚聲雷の如く、ゴールに入る事數歩にして、玆に雌雄を決せられたりかくと見るや、各級潮の如く闖入れ、各撰手を擁して萬歳を連呼した。

一着　中村喜太郎
二着　廣田賢藏
三着　金子義長
四着　吉川友信
五着　矢能孝治

吁待ちに待ちたる第二回運動會も、恁の如にして、終りを告けた。やかて、集レの號令によりて、吾人は横隊に整列し、會長より講評を給ひ、運動會萬歳を三唱して三々五々歸路についた、今貰ひし計りの紀念日の菓子を嚙りながら。

劇しかりし風も、今は全く死し、果てゝ、煙を収めた煙筒は只矗乎と計に立つた儘。晩鴉一又二、その重たげなる羽打ふりて、安らかな塒に皈るのだ。あゝ實に平和な夕景だ。か樣にして黄昏の幕が、一歩一歩に、迫り行くのだ、山の彼方より海の彼方に……。

那邊からか琵琶の一節、

「我此度の戰は……」　后は蛙鳴に紛れて。

○第八回講話大會記事

ヨシ生

五月二十三日午前九時より濟々堂に於て開催

▲開會の辞　櫻井副會長
▲講演につきての注意數項　上田部長
さて愈々講話は開かれぬ
▲吾人の元氣と「エヂルギー」　通常會員　楠野末太郎君
元氣とエヂルギーを結びつけたる論、
▲下痢の原因　通常會員　鈴木正孝君
獨逸語にて下痢の來るべき塲合を述べらる
▲情に厚き姉の燈　通常會員　毛戸四郎君
獨逸語伽話
▲花は櫻木人は武士　通常會員　村上盛窄君
獨逸語演説
▲ペーテル、シユレミール物語の一節　通常會員　鈴木彌君
シヤミソーがペーテル、シユレミール物語の一節を獨逸語にて
▲一口話（英語太郎の答　獨逸語トンマノ御宿）　通常會員　中山富節君

英語と獨逸語とを巧に入れまぜた笑話

▲副　腎　通常會員　齋藤祐男君

獨逸語にて副腎の解剖、生理一般を述べらる

▲外國語修學上の注意　山崎教授

教授は獨逸語もて豫定の患者供覽は都合ありて中止し外國語殊に獨逸語修學上に關し注意すべき事項を說き示さる吾人はいつも教授の賜る注意によりて思はざる欠点を覺悟し且つは上達の要訣に摸索し得るは深く感謝する所なり

▲學　生　通常會員　山本直枝君

學生生活に於ける快味を說かる獨逸語演說としては蓋し本日出演の通常會員中上乘とすべきか

▲所　感　石川教授

目下我邦に廣く行はるゝ宗教は人生少くとも修學につとめつゝある學生には其要なかるべしとの案

▲吾が故郷　通常會員　轟　茂君

懷郷感を說く

▲偶　感　通常會員　永井敬孝君

蓍醫の經驗と効用を說く、好漢惜むらくは細菌學的衛生學上の討究を缺ける事を

▲醫術と仁術　通常會員　高木安治君

獨逸語にて醫師の高尙なる任務を述ぶ

▲言語に就て　通常會員　黑田孝夫君

言語の起原と其必要を說く

▲「フェノール」に就て　通常會員　上遠野與作君

「フェノール」を論じたる獨逸語演說

午　餐　一時間休憩

▲トラホーム　フォリケルの顯微鏡的所見　通常會員　米永勇作君

顆粒の組織的所見を述べたる獨逸語講話

▲精神機能の食欲に及ぼす影響　佐々木教授

食欲が精神的感動に關聯を有する事理を動物試驗によりて証明し胃病者の治療上また胃液檢査の際注意すべきを說かる

▲朗　讀　通常會員　池部正鑒君

西行法師が憐れの物語

▲肥厚性脊髓硬膜炎の一例　特別會員　勝木直吉君

初め本病の一般につき畧述し、次に經驗例を述べらる、症例は十九年の女にして病の占位は頸部にあり、原因として梅毒に疑ありと

▲振顫麻痺患者の供覽　特別會員　吉尾開道君

本疾の一般に就きて述べたる後、該症の著明なる一患者を説示せらる

▲エルウエルムンゲに就て　特別會員　岡本京太郎君

Erwärmung なる一疾患を區別するの要ありとて詳論せらる……講演筆記は次號に掲載すべし

討論　上田教授

岡本氏の述べられたる疾患は屢々經驗する所にしてこは慢性の蓄温症と見るべきなりと

▲失語症患者の供覽　特別會員　今村文碩君

失語症の病理を詳説し心辨膜病に伴發したる腦血管栓塞に由來せる該患者三名に就き述べらる

▲宮田外科に於ける夜尿症治療成績を述べ併せて諸氏に望む　特別會員　村山常三郎君

夜尿症の處置としてカテラン氏硬膜外注射療法の統計を示し著しく良成蹟を得たりと云ふ

▲一二の「デモンストラチオン」金子教授

單眼症及癒着指の模型を示し其成立の理を説かれたり

▲睫毛倒生に對する一術式に就て　特別會員　石坂直次郎君

睫毛倒生手術につき種々の術式を折衷したる一式を創意し良好の結果を收め得たりとて其方式を説かる猶更に臨床上の魔術なりとて、眼瞼内異物ある比斯帝里性の一患者に對し些の氣轉にて自覺症を去りたる一經驗例を述べられき

▲肺結核の療法　特別會員　島誠郁君

肺結核の熱に對する處置を詳述し、マレチンの特に効驗ありし事ありとて該藥を推奬し、更に轉じて血清療法につき畧述せらる

▲石炭酸脱疽の一例　通常會員　伊藤哲一君

該症の一例を述べ實地開業醫家の猶石炭酸を過用し又通俗の誤用によりて之に因る脱疽の尠なからざるを説き該症の病理に就き細論せらる

▲「オプソニン」治療　上田教授

白血球喰食作用に因由したるライト氏の「オプソニン」治療の學説を略説し最近經驗の二例即ち痘瘡患者に來れる皮下膿瘍と鬚瘡患者とに施したる成績を述べらる

▲閉會の辭　上田部長

時に午後六時

當日通常會員の殆んど全部、また午後には市内及び郡部の特別會員多數の出席ありて甚だ盛會なりき

○藥學科學科目及程度改正

九月三日發布ノ文部省令第二十五號ニヨレバ明治四十年文部省令第十號官立醫學專門學校規程第三條中藥學科ノ學科目及其ノ程度ヲ左ノ如ク改メラル

學科目＼學年	第一學年	第二學年	第三學年
	每週教授時數	每週教授時數	每週教授時數
倫理	一		
獨逸語	八	四	六
鑛物學	一		
化學 理論及實驗	七、五		
藥用植物學 理論	三		
藥用植物學 實習及顯微鏡用法	三	三	
生藥學 理論		三	
生藥學 實習		二	
分析學 理論		二	
分析學 實習	二	九	
衛生化學 理論		二	
衛生化學 實習			六
衛生化學 細菌學理論及實習	二		
裁判化學 理論	一		
裁判化學 實習	三		
藥局方 日本藥局方外國藥局方要領	一、五		
藥品鑑定	五		
調劑學 理論	一		
調劑學 實習	二		
藥化學 理論			
藥化學 實習	五		
機械學大意	三		
藥品工業學 理論	一、五	一、五	
藥品工業學 實習	不定時	不定時	
體操	三		
計	二八、五	三二、五	三九

（備考）各學科第二學年以上ニ於ケル倫理ハ特ニ每週教授時數ヲ定メス適切ノ時期ニ於テ隨時之ヲ課スルモノトス

本令ハ明治四十年九月十一日ヨリ施行ス

○本校細則改正

……校務分掌規程及ビ級長幹生規程等……

校務分掌規程

第一條　校務ヲ分掌セシムルタメ醫學科藥學科及敎務課生徒課庶務課會計課圖書課ヲ置ク

第二條　各學科ニ科長ヲ置キ當該學科ニ關スル事務ヲ管理シ兼テ校務重要ノ件ニ參與セシム

第三條　學科長ハ敎授中ニ就キ校長之ヲ選定ス

第四條　各課ニ主任ヲ置キ其課ニ屬スル事務ヲ分掌セシム

第五條　主任ハ職員中ニ就キ校長之ヲ命ズ

第六條　生徒課ノ事務ハ生徒監之ヲ管理ス

第七條　課員ハ上官ノ指揮ニ從ヒ各々其職務ニ從事ス

第八條　學科長若シクハ生徒監不在中ハ上席教授之ヲ代理シ主任不在中ハ上席課員之ヲ代理ス

第九條　二名以上ノ教官ヲシテ一科ヲ分擔セムシルトキハ首席教授ヲ主任トシ該科ニ屬スル事務ヲ掌理セシム

第十條　課ノ擔任スベキ要項左ノ如シ

教務課

一　學科課程教室及授業ニ關スルコト
二　体操ノ副科ニ關スルコト
三　入學生徒宣誓ニ關スルコト
四　生徒募集及入退學ニ關スルコト
五　生徒學籍ニ關スルコト
六　生徒出席缺席等調査ニ關スルコト
七　試業進級及卒業ニ關スルコト
八　卒業生ニ關スルコト
九　陸軍衛生部依託生徒ニ關スルコト
十　級長及幹生ニ關スルコト
十一　行軍演習及修學旅行ニ關スルコト
十二　得業士學力檢定ニ關スルコト
十三　屍体解剖ニ關スルコト
十四　本課ニ屬スル物品ヲ管理スルコト
十五　此他教務ニ關スル事項

生徒課

一　生徒心得及生徒ノ服制ニ關スルコト
二　生徒ノ操行ニ關スルコト
三　生徒ノ訓誡及處分ニ關スルコト
四　生徒ノ宿所ニ關スルコト
五　生徒控所及教室取締ニ關スルコト
六　生徒ノ諸集會及掲示ニ關スルコト
七　生徒ノ身体檢査及衛生ニ關スルコト
八　生徒ノ學資ニ關スルコト
九　生徒ノ盜難及紛失物ニ關スルコト
十　本課ニ屬スル物品ヲ管理スルコト
十一　此他生徒ニ關スル事項

庶務課

一　校印及校長官印ヲ管守スルコト
二　職員進退身分及服務ニ關スルコト
三　職員名簿及履歷書ニ關スルコト
四　規則及校長ノ命令傳達ニ關スルコト
五　規則及細則ノ創定變更ニ關スルコト
六　公文書ノ接受發送及淨書ニ關スルコト
七　文書ノ編纂及保存ニ關スルコト
八　年報一覽及報告ニ關スルコト
九　儀式ニ關スルコト
十　生徒兵役ニ關スルコト
十一　諸願伺及屆ニ關スルコト
十二　拾得及遺失物ニ關スルコト
十三　當直ニ關スルコト

十四　參觀人取扱ニ關スルコト
十五　本課ニ屬スル物品ヲ管理スルコト
十六　他課ノ主掌ニ屬セザル事項

會計課

一　資金ニ關スルコト
二　豫算及決算ニ關スルコト
三　官有財產ニ關スルコト
四　收支証明ニ關スルコト
五　金錢出納ニ關スルコト
六　物品購買及修理ニ關スルコト
七　物品出納ニ關スルコト
八　不用物品賣却ニ關スルコト
九　土地建物ノ營繕ニ關スルコト
十　校內ノ警備及衞生ニ關スルコト
十一　巡視以下傭人ノ進退及取締ニ關スルコト
十二　通信機ニ關スルコト
十三　本課ニ屬スル物品ヲ管理スルコト
十四　此他會計ニ屬スル事項

圖書課

一　圖書ノ印ヲ保管スルコト
二　圖書ノ出納整理保存ニ關スルコト
三　圖書目錄編纂ニ關スルコト
四　圖書室及閱覽室ニ關スルコト
五　本課ニ屬スル物品ヲ管理スルコト
六　此他圖書ニ關スル事項

以上

級長幹生規程等

左記ノ條項改正

第二條級長及幹生規程第一條乃至第三條及第五條中學生ヲ生徒ト改ム

第七條圖書閱覽室規程第三條中携帶ヲ携出ト改ム

○入學式

稻田百里黃金の波漸く靡かんとする九月十一日、百四十五名の新入生徒は、覇氣滿々、時ならぬ紅葉の錦を心に纏ひて、肅々濟々堂に集ひ、午前八時茲に入學式は擧げられたり。

校長閣下は生徒心得を朗讀し、專門學科修學の學徒が心得れくべき事項に就き懇篤なる訓諭を給ひ、山碕敎授十全會理事として本會に關する諸般の注意を與へられ、阿部敎授新入生徒に代り宣誓書を朗讀せらる。之にて全く式は終了し、各自校長室に於て謹んで宣誓書に署名し以て諸則を服膺し多年望みに望みし醫藥の道をたどらん事を誓ひぬ。

○新入學者氏名

本年、本校に於ける入學者は、醫學科入學志願者四百四

十七名、藥學科入學志願者三十六名中より、七月三日より、同六日より亘れる學術試驗、及び体格檢査によりて、選拔の上、醫學科へ百十四名、特外二名、藥學科へ二十八名、特外一名、入學を許可せられたり、其本籍氏名を左に記す。

島根	今村鐵夫	新潟	丸山浩平
新潟	赤澤眞次郎	富山	島豐喜
長野	上原寅太郎	石川	福里次吉
福岡	高崎文雄	愛知	春田信行
石川	鳥居環	富山	藤岡孫喜
福井	上島耕治	石川	北島辰太郎
石川	丸谷定雄	三重	青木國三郎
奈良	北浦德太郎	岐阜	吉尾甚喜知
新潟	木下熙	愛知	鈴木康弐
新潟	五十嵐齊	三重	中谷三網
山梨	八田三郎	石川	根布定吉
新潟	村山三男三郎	石川	藤田孫太郎
愛知	岩田高明	石川	吉見昌造
富山	中田秀貞	石川	金田友三郎
滋賀	杉原周輔	石川	青木伸一
新潟	高橋邦次郎	福井	齋藤金則
京都	岡田新雄	石川	源明藤吉
大坂	向井喜内	奈良	日置恭三
京都	北野榮藏	兵庫	宮本品太郎
富山	笠島宗之	山梨	山角彙晏
石川	本正生	新潟	加勢基
石川	宮野外男	石川	中野石太郎
和歌山	的場具行	滋賀	田原利崇
石川	藤澤好彦	石川	神谷外喜男
石川	寛永義長	岐阜	岩佐利一
石川	坂井貞準	長野	上島政雄
愛知	松原義憲	群馬	廣瀨勇
德島	山川匡男	石川	篠田嘉年
鹿兒島	菱刈碩文	山形	村上錦六
福井	坂東達	山形	西野勝藏
愛媛	大西俊明	神奈川	石渡七郎
靜岡	渥美德太郎	石川	安江芳雄
石川	伊藤芳廣	長野	小池勇助
石川	住吉三郎	岐阜	小野江爲孝
茨城	中島儀一郎	石川	永野保
福井	塚本秀十郎	滋賀	沼波彌惣太郎
石川	端谷豐吉	愛知	大島重雄
奈良	植島寛一	石川	喜多禎次
東京	田邊鼎介	新潟	岩崎省三

新潟　藤卷敏太郎　富山　吉川誠
石川　上原成之　德島　宇山春禧
石川　小池才一　長野　松山金次郎
岡山　永山昇一　德島　多田芳輝
滋賀　雨森良順　高知　野村登彌太
石川　竹内善松　栃木　富田豐咲
石川　前川敬悅　山梨　古屋菊男
愛知　森田耕一　石川　山下一義
北海道　田中徹　岐阜　白木孝一
石川　織田時平　石川　牟田五三郎
富山　正印義正　長野　北村信定
茨城　秋田哲　石川　行事喜作
愛知　佐竹仁三　石川　西東榮次郎
山口　宮竹介次　愛知　河原鉉三
富山　岡田申吉　石川　北村清太郎
三重　松浦謙三　靜岡　內田憲男
和歌山　小山角次郎　福井　佐々木武
石川　松江常行　滋賀　久保井末造
長野　安藤儔次

特別外國入學生

清國　周頌聲　清國　張黻鄉

以上醫學科

香川　今澤義三郎　愛知　平野懋
茨城　高島良次　愛知　鈴木嘉一郎
富山　伊東豐太郎　島根　佐々木武雄
石川　山田彥十郎　石川　松井正倫
石川　小幡富三郎　岐阜　說田義隆
岐阜　鹽谷秀滿　石川　吉澤榮三
石川　館昌次　京都　上田小三郎
岡山　安藤千秋　石川　松田卷耳
德島　安宅清三郎　靜岡　平野麻太郎
大坂　野口次郎　長野　岡田一郎
石川　松井啓　石川　磯部佐外
石川　野澤彖吉　石川　安達鉾吉
長野　山岸勘吉　岐阜　塚原茂
石川　山田甚太郎　石川　川崎乙松

特別外國入學生

清國　李繩

以上藥學科

○新入學諸君を迎ふ

本會は、歡迎の筆をとりて、新に入學試驗の關を排して、囫の堂に上れる、勇士諸君に見ゆ。

入學の許可を得られし、諸君の歡喜や、察するに餘りあり、從つて鋭氣旺盛、又忖度するに難からず。然れども、深遠なる學業の臺閣は、豈輕易にして、建設し得べきものならんや。されば、諸士既に自ら得る所あらむも、益その精鋭不撓の神を皷して、進まれむとを、切に望むの所以なり。請ふ手をとつて學ばむ哉。

○本年度十全會役員及級長、幹生

左の諸氏なり

會長　高安右人
副會長　櫻井小平太
理事　山碕幹
書記　山本兵三郎　笹井仁作　崎田誠四郎　安達友直　押野與吉

雜誌部
部長　宮田篤郎
委員　加藤靜雄　小原芳雄　川島俊　大島　津田次助　德久恒治　吉田圓麿　白石福三郎　三國範三　米多外男　杉原周輔　北野榮藏　中山富次郎　井上廉太郎　安達鈔吉
醫、四　全、三　全、二　全、一　藥、三　全、二　全、一

講話部
部長　金子治郎
委員　佐々城清臣　佐口榮　崎田誠四郎

委員　醫、四　長井敬孝
仝　小野澤庄桂
仝、三　黑田孝夫
仝　馬詰定衛
仝、二　小泉與四郎
仝　岩瀨國義
仝、一　鳥居環
仝　五十嵐齊
仝　藥、三　酒井謙次郎
仝、二　柳町茂家
仝、一　山田彦十郎

ロンテニス部

部長　村田金太郎
委員　林　篤
仝　醫、四　高儀京治
仝、三　板谷外之助
仝　醫、二　清水憲策
仝　醫、一　吉田　稔
仝　藥、三　三野泰二郎
仝　藥、二　牧野新之亟
仝、一　平野麻太郎

劍道部

部長　高山基重
委員　野崎芳孝
仝　醫、四　本仙太郎
仝、三　絹川義温
仝、二　加藤末吉
仝、一　島豐喜
仝　藥、三　森善次
仝、二　御影藤太郎
仝、一　舘昌次

弓術部

部長　村上庄太
委員　影山清美
仝　醫、四　茨木忠俊
仝、三　角田眞一
仝、二　延川清
仝、一　篠田嘉年
仝　藥、三　田中儀一
仝、二　大島時
仝、一　山田甚太郎

柔道部

部長　石川喜直
委員　笹井仁作

委員　醫、四　佐竹秀一
仝、三　北村裕壽
仝、二　志村猪藏
仝、一　丸山浩平
藥、三　本庶英献
仝、三　矢能孝次
仝、一　吉澤榮三

茶話會

委員長　阿部莊二
委員　山本兵三郎
仝　醫、四　國吉眞才
仝　山本直枝
仝、三　奥山義盛
仝　松下嘉右衞門
仝、二　石川清治
仝　武田良海
仝、一　喜多頑次
仝　多田芳輝
藥、三　中村重好
仝　岡部郁二郎
仝、二　川崎幾左右
仝　後藤重彦

委員　仝、一　高畠良次
仝　松田卷耳

學術實習部

部長　佐々木遠
司療醫　小原芳雄
仝　丹羽直
調劑司　三木榮末
委員　醫、四　松村喜一
仝　近藤清吾
仝、三　吉川六郎
藥、三　治多信章

代議員

醫、四　吉田隆二
仝　小野澤庄桂
仝、三　中村喜太郎
仝　轟茂
仝、二　佐藤進
仝　小泉與四郎
仝、一　白木孝一
仝　高畑伊平
藥、三　島亮二
仝、二　住山伊衛

全、一　今澤義三郎

劍道部師範　中村余所吉

弓術部師範

柔道部師範　藤森千春

仝　補助　吉田宗一

醫學科第四年級々長　佐々木教授

幹生　松村喜一

近藤清吾

山本直枝

鈴木伊作

成田高仁

小野澤庄桂

仝　第三年級々長　宮田教授

幹生　鈴木英男

矢吹清

中村長太郎

仝　第二年級々長　奥山義盛

幹生　吉川六郎

馬詰定衛

金子教授

小泉與四郎

佐藤進

村松純吉

三國範三

米多外男

米山健

仝　第一年級々長　石川教授

幹生　今村鐵夫

高橋邦次郎

正印義正

岩田高明

丸山浩平

宮竹介次

佐々木武

行事喜作

加藤講師

中山富次郎

廣瀬玄哉

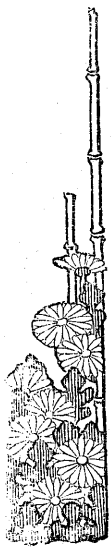
藥學科第三年級々長

幹生

仝　第二年級々長　高山教授
　　幹生　住山伊衛
　　川崎幾左右
仝　第一年級々長　林　助教授
　　幹生　今澤義三郎
　　佐々木武雄
　　小幡富三郎

○雜誌部編輯會記事

十月十日午後三時本校病理教室に於て、本學年にける第一回編輯會開設。部長宮田先生を甫め小原先生、川島氏外委員一同着席、先づ、宮田先生の挨拶に亞き、直ちに各員部署の撰定にうつる、從來委員各級によりて分擔處理を異にせし舊例を排し、專ら各員の技能に應し、便役に隨ふことゝなし、各分擔を定め其他、校外特別會員に時々原稿依賴狀發送の件、寄贈雜誌整理の件、雜誌一部の豫定紙數、本學年中の豫定發行度數及び期日を討議し、同五時散會せり。



會告

○寄贈及交換書目（十月二十日迄領收ノ分）

日本醫事週報	六九、一二、三、四、五、六、七、八、八、九、七〇〇、	同
醫海時報	四、七、八、七三、二、三、四、五、六、七、八、九、四〇、二、三、	同
東京醫事新誌	一五、六、七、八、九、七〇、一、二、三、四、五、六、七、八、九、八〇、一、二、三、四、五、	同
醫事新聞	七六〇、一、二、三、四、五、六、七、八、	同
藥石新報	六四六、八、九、五〇、一、二、三、四、五、六、七、八、	同
藥學雜誌	三一六、七、八、九、	日本藥學會
中外醫事新報	六七八、九、八〇、一、二、三、四、五、	同
日本眼科學會雜誌	二ノ六、七、八、九、	同
順天堂醫事研究會雜誌	四二六、七、八、九、	同
岡山醫學會雜誌	三三一、二、三、四、	同
中央醫學會雜誌	八〇、	同
醫學中央雜誌	六四、五、六、七、	同
藝備醫事	四五、六、七、八、	同
鎮西醫報	一一三、四、	同
成醫會雜誌	三一六、七、八、九、	同

臺灣醫學會雜誌　六七、八、九、七〇、
臨床彙講　二四、五、六、七、
助產ノ栞　一四五、六、七、八、
日本婦人科學會雜誌　三ノ二、三、
衛生談話　八ノ五、六、七、八、
東京醫學會雜誌　三ノ一、二、三、四、五、六、七、八、九、
廣島衛生醫事月報　一一四、五、六、七、
軍醫學會雜誌　一七一、二、
治療新報　七六、七、八、
產科婦雜誌　一〇三、四、五、六、
醫談　一一三、
皮膚科及泌尿器科雜誌　八ノ二、
大日本耳鼻咽喉科會々報　一四ノ三—四、
大阪醫學會雜誌　七ノ六、七、八、九、一〇、
國家醫學會雜誌　二五四、五、六、七、
神經學雜誌　七ノ四、五、六、七、
京都醫學會雜誌　五ノ二、三、
北越醫學會々報　一六五、
好生館醫事研究會雜誌　一五ノ四、
東北醫學會々報　四九、
靜岡縣醫會會々報　二一二、
研瑤會雜誌　八五、六、

同會
醫學書院
緒方助產婦學會
同會
日本通俗衛生會
同會
同社
陸軍々醫學會
同社
日本產科婦協會
同發行所
日本皮膚科學會
同會
同會
同會
日本神經學會
仝會
仝會
仝會
同仙台醫學專門學校會
同會
同長崎醫學專門學校會

北海醫報　八ノ二、
東洋醫事新報　一九、
校友會雜誌　四七、
校友會雜誌　四七、
校友會雜誌　四三、
大日本私立衛生會雜誌　三〇二、三、四、五、
躬行會叢誌　三九、四〇、
治療藥報　三七、八、九、四〇、
莊內醫學會々報　六五、六、
眼科臨床醫報　三〇一、二、三、
北辰會雜誌　五一二、
校友會雜誌　二、
若越醫談　六、
日本消化機病學會雜誌　七ノ二、
日本助產婦新報　三三、三、五、七、
電音計診斷雜誌　一—二、
緒方婦人科學紀要　第二卷一冊
結核病と社會問題　一冊

北辰病院研究會
私立東京醫學校編輯部
京都府立醫學專門學校會
同東京開成中學校會
同千葉醫學專門學校會
同會
同會
同會
北越眼科研究會
第四高等學校會
同山口縣立德山中學校會
同若越醫學會
同會
同發行所
松村四郎君
中央婦人科學會
竹中敏次郎君

○四十一年度金澤醫學專門學校十全會收入豫算書

科目	豫算額
第一欵　金澤醫學專門學校十全會	一、四〇八、三四〇円
第一項　特別會員寄附金	一六九、八四〇
第一目　職員寄附金	一六九、八四〇
第二項　通常會員會費	一、〇六六、〇〇〇
第一目　醫學生會費	九三〇、〇〇〇
第二目　藥學生會費	一三六、〇〇〇
第三項　入會金	一二〇、〇〇〇
第一目　入會金	一二〇、〇〇〇
第四項　利金	五二、五〇〇
第一目　預金利子	五二、五〇〇

○四十一年度金澤醫學專門學校十全會經費豫算書

科目	豫算額
經常部	
第一欵　金澤醫學專門學校十全會	一、三六〇、三四〇円
第一項　春季陸上運動會費	二〇八、〇〇〇
第一目　春季陸上運動會費	二〇八、〇〇〇
第二項　講話部	四〇、〇〇〇
第一目　大會費	三八、〇〇〇
第二目　通常會費	二、〇〇〇
第三項　雜誌費	四八〇、〇〇〇
第一目　雜誌費	四四六、四〇〇
第二目　通信費	一五、六〇〇
第三目　消耗品費	七、〇〇〇
第四目　製本費	一〇、〇〇〇
第五目　雜費	一、〇〇〇
第四項　ロンテニス部費	七五、〇〇〇
第一目　ロンテニス部費	六〇、〇〇〇
第二目　大會費	一五、〇〇〇
第五項　劍道部	七〇、〇〇〇
第一目　大會費	三〇、〇〇〇
第二目　奬勵費	四〇、〇〇〇
第六項　柔道部	七二、〇〇〇
第一目　大會費	三二、〇〇〇
第二目　奬勵費	四〇、〇〇〇
第七項　弓術部	五五、〇〇〇
第一目　大會費	一五、〇〇〇
第二目　備品費	三〇、〇〇〇
第三目　南山修繕費	五、〇〇〇
第四目　奬勵費	五、〇〇〇
第八項　會務費	九四、五〇〇

第一目　備品費　二二、〇〇〇
第二目　印刷費　〇、五〇〇
第三目　消耗品費　五、〇〇〇
第四目　雜費　七、〇〇〇
第五目　茶話會費　六〇、〇〇〇
第九項　學術實習部　八〇、〇〇〇
第一目　藥品材料費　五〇、〇〇〇
第二目　備品費　二〇、〇〇〇
第三目　雜費　一〇、〇〇〇
第十項　豫備費　六四、八四〇
第一目　豫備費　六四、八四〇
第十一項　端艇基金　一、〇〇〇
第一目　端艇基金　一、〇〇〇
第十二項　借入金償還　一二〇、〇〇〇
第一目　借入金償還　一二〇、〇〇〇

○四十一年度金澤醫學專門學校十全會臨時部經費豫算書

科目	豫算額
臨時部	
第一款　新營費	四八、〇〇〇円
第一項　射場雨覆新設費	一八、〇〇〇
第二項　ロンテニスコート新設費	三〇、〇〇〇

○四十一年度金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費收入豫算書

科目	豫算額
第一款　金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費	一、三六六、八五八円
第一項　校外特別會員會費	一、〇一〇、六〇〇
第一目　四十一年度會費	六一〇、六〇〇
第二目　前年度未納會費	一〇〇、〇〇〇
第三目　前納會費	三〇〇、〇〇〇
第二項　利金	三一、九五八
第一目　預金利子	三一、九五八
第三項　繰越金	三二四、三〇〇
第一目　繰越金	三二四、三〇〇

○四十一年度金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費支出豫算書

科目	豫算額
第一款　金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費	七四二、五五八円
第一項　校外特別會員會費	五二五、六〇〇

第一目　雜誌費　四四一、六〇〇
第二目　通信費　六六、〇〇〇
第三目　雜費　一八、〇〇〇
第二項　豫備費　七四、〇〇〇
第一目　豫備費　七四、〇〇〇
第四項　維持資金へ組入　一四二、九五八
第一目　維持資金へ組入　一四二、九五八

○自明治四十一年九月一日至仝年十月十五日校外十全會費納付調書

金額	期限	氏名
金參圓	（自四十一年度至四十三年度三ヶ年分）	瀧澤忠一郎君
金參圓	（自四十一年度至四十三年度三ヶ年分）	富澤圭太郎君
金參圓	（自四十一年度至四十三年度三ヶ年分）	小西孝德君
金參圓	仝	酒井碩治君
金參圓	仝	伊藤哲一君
金參圓	仝	佐竹清吉君
金參圓	仝	長久開一郎君
金參圓	仝	藤崎榮吉君
金參圓	仝	駒田一正君
金參圓	仝	若槻寛隆君
金參圓	仝	名取博三君
金參圓	（自四十一年度至四十三年度三ヶ年分）	太田得郎君
金參圓	仝	加藤錠吉君
金參圓	仝	奥山正雄君
金參圓	仝	新谷成三郎君
金參圓	仝	竹中精一郎君
金參圓	仝	大原米次郎君
金參圓	仝	上木隆基君
金參圓	仝	楠正之君
金參圓	仝	福田美明君
金參圓	仝	大野留次君
金參圓	仝	莊田芳根君
金參圓	仝	岡崎虎次郎君
金參圓	仝	河合勝君
金參圓	仝	吉田誠一君
金參圓	仝	吉澤祐寛君
金參圓	仝	加藤健之助君
金參圓	仝	堀雅壽君
金參圓	仝	西坂武茂君
金參圓	仝	中川善松君
金參圓	仝	宮村誠一郎君
金參圓	仝	田中三彌君
金參圓	仝	辻井禮太郎君

金參圓（自四十年度至四十四年度五ヶ年分）
金參圓（自四十一年度至四十三年度三ヶ年分）
金參圓全　藤井温良君
金參圓全　長谷川愛之助君
金參圓全　鈴木琢磨君
金參圓全　田島耕平君
金參圓全　上村貫三君
金參圓全　西勝人君
金參圓全　今井外吉君
金參圓全　山崎太一君
金貳圓（自四十年度至四十一年度二ヶ年分）
金參圓（自四十一年度至四十三年度三ヶ年分）
金參圓全　村田太二郎君
金參圓全　韓清泉君
金參圓全　厲家福君
金參圓全　河崎正雄君
金參圓全　乾一夫君
金參圓全　梅田幸三君
金參圓全　馬庭駿一郎君
金參圓全　小林唯四郎君
金參圓（自四十一年度至四十五年度五ヶ年分）
金參圓（自四十一年度至四十三年度三ヶ年分）
金參圓全　松浦啓三君
金參圓全　鈴木啓一郎君
金四圓（自三十八年度至四十一年度四ヶ年分）
金參圓（自四十一年度至四十三年度三ヶ年分）
金參圓全　才田猶次君
金參圓全　眞柄佐一郎君
金參圓全　美原文二君
金參圓全　寺田久十郎君

金參圓（自四十一年度至四十五年度五ヶ年分）
金參圓（自四十一年度至四十三年度三ヶ年分）
金參圓全　坂井廸太郎君
金參圓全　木村朋三君
金參圓全　岩井源市郎君
金參圓全　古屋與三君
金參圓全　月岡勝治君
金壹圓（三十九年度分）
金貳圓（自四十一年度至四十二年度二ヶ年分）
金參圓（自四十一年度至四十三年度三ヶ年分）
金參圓全　高橋八郎君
金參圓全　金子義長君
金參圓全　小林進君
金參圓全　關根平君
金參圓全　城谷隣賢君
金參圓全　岡勝重君
金參圓全　木越豐松君
金參圓全　服部暢助君

▲▲▲編輯局より▼▼▼▼

○年度の改まり候と共に不肖等本誌編輯の任に就き申し候懸命の鞭韃相加へ精一杯の勉强致す考に候が何分にも識と筆に欠けたる者共に候へば諸賢の示教を俟ちて啓發改善致すことも多々有之るべくと存じ候何にせよ一層の御援助の程偏に願上候

○編輯方針などは今日の處別に從前とかわり無之候然し內容を精々精選致すことと發行回數は豫定通りにする事は勉むる覺悟に候

○各欄とも投稿を歡迎致し候何卒隨時雜誌部宛又は部員宛にて續々御投書冀ひ申し候

○校內特別會員の方々へは委員を校外の諸賢へは端書にて時々玉稿頂戴に推參致さすべく候段豫め御含み願上候

○これは雜誌發送上の事項に候が校外特別會員諸君の中、住所不明にて未發送のものも有之又幾度か郵便事務員を煩して返送と相成り候もの尠なからず候これ等は已むなく原籍地等へ宛郵送申し候へ共確に落手致され候や懸念に候向後住所御變動の節は御一報煩し度是當部の便宜のみには御座なく候

從來發送係の手數少なかりしため、いつも諸君か机上に到るは發行期日よりも著しく相後れ候義は深く御詫び申し候されど今後は斯る事なき樣相勗むべく候

猶第五十號以前のものにて御落手無之き方は此際至急號數、現住所明記の上御申出相成り度候

○新學年の第一號たる本號は十月下旬發行の豫定に有之候處挿入の寫眞版及び附錄印刷の都合にて遂に此月に入り申し候

○諸兄より御投稿相受け候原著以下各欄の原稿にて本號へ掲載致さゞりしもの澤山に御座候これらは次號以下に於て掲ぐべき筈に候

○第五十二號發行は十二月初旬の豫定に候從て投稿〆切は十一月二十日に御座候

▲▲▲編輯局より▼▼▼▼

廣告

○高安博士在職二十年祝賀會費寄附金受領第三回報告

受領月日	金額	氏名
八月十一日	金壹圓五拾錢	河合鷹君
八月二十五日	金五拾錢	中西吉太君

合計金貳圓

累計金六百拾四圓貳拾錢

明治四十一年十月十九日

祝賀會々計係

▲▲講習生ハ日本消化機病學會會員ニ限ル▼▼

◉消化機病學第七回講習

（講習期）自明治四十一年十月一日至明治四十一年十二月二十日

（講習生）參拾五名募集

右講習生ヲ募集ス

東京市麹町區内幸町一丁目三番地

胃腸病院

（電話新橋百六十八番）

▲▲規則書入用ノ方ハ郵券貳同封申込アレ▼▼

醫學博士緒方正清主幹

緒方婦人科紀要

第一卷

佝僂病及骨軟化病論　菊版紙數六百余頁、地圖、寫眞版、
模型　顯微鏡諸圖　レントゲン畫譜等　數十枚

會費金貳圓五拾錢

醫學博士緒方正清主幹

緒方婦人科紀要

第二卷

會費金壹圓八拾錢

目次

佝僂病性骨軟化病屍體解剖ノ一例　醫學博士　緒方正清
醫學士　水口耕治
得業士　梶　完次
人類胎盤ヲ化學的成分ニキテ　醫學士　寺光寺　錫
婦人科ニ於ケル水及ビ刀　ドクトル　ストラッスマン
日本アイヌ琉球及ビ支那、四種族婦人ノ月經ニ就キテ　醫學士　山崎正董
動物ノ諸器官殊ニソガ姙娠ニ於ケルレントゲン線應用ノ成績　ドクトル　ブルックハルド
如何ニ子宮後轉及後屈症ヲ處置スベキカ　ドクトル　川添正道

骨軟化病ニ於ケル眼變常ニ就テ　ドクトル　內藤　達

佝僂病及ビ骨軟化病ノ臨床的診斷法　醫學博士　緒方正清

褥婦ノ攝生論　醫學博士　ヘーガル

胎兒臍帶ノ捻轉斷裂ノ一例　醫學士　水口耕治

篠山地方ニ於ケル骨軟化病ノ一例　女醫　橘　薫

分娩時ニ於ケル兒頭及ビ骨盤ノ關係　得業士　足立丑松

シユルチヱ氏振搖蘇生術ニ就テ　ドクトル　シユワーブ

佛教經卷中ニ散見セル產科觀　ドクトル　樋口繁次

緒方正清著「佝僂病及ビ骨軟化病ノ本態ニ就テ」ニ對スル卑見　醫學博士　山極勝三郎

佝僂病及ビ骨軟症ハ同一疾病ナルベシトノ考案　醫學博士　田代義德

緒方博士ガ富山奇病論ヲ讀ム　醫學士　關塲不二彥

ケーレル教授ヨリ緒方博士ニ宛タル書簡

オーベルライン產科婦人科學會報告　醫學士　水口耕治

明治四十年度ニ於ケル我邦產科婦人科論著ノ抄錄　醫學士　山崎正董

第一卷第二卷共入會次第送本可致候

發行所　中央婦人科學會

取扱所　東京　大阪　丸善株式會社書店

懸賞論文募集

一問題　脚氣ニ於ケル血管系統ノ解剖的變化

一論文ハ本學ニ於テ審査ヲ遂ケ優等ノモノヘ醫學中央雜誌社寄付金參百圓ノ内ヨリ懸賞金ヲ與フ

一論文ハ來ル四十二年六月三十日マテニ東京帝國大學醫科大學事務室ヘ送付スヘシ

明治四十一年七月

東京帝國大學醫科大學